

— 茨城県土浦市 —

前神田遺跡（第2次調査）

— 宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

2023

有限会社 エイ・エム・エー
勝田商事有限会社
土浦市教育委員会
株式会社 地域文化財研究所

— 茨城県土浦市 —

まえ しん でん い せき
前神田遺跡 (第2次調査)

— 宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

2023

有限会社 エイ・エム・エー
勝田商事有限会社
土浦市教育委員会
株式会社 地域文化財研究所

序

土浦市は、霞ヶ浦や桜川といった自然環境に恵まれた都市です。貝塚や古墳など数多くの遺跡が立地し、古くから人々の暮らしが営まれてきました。これらの遺跡は、昔の生活や文化を現代の私たちに伝えてくれる貴重な遺産といえます。このような貴重な文化遺産を保護し後世に伝えることは、土浦市の重要な責務であり、郷土の発展のためにも大切なことです。

この度、市内神立町に所在する前神田遺跡において宅地造成に伴う発掘調査が行われました。この調査の成果が、学術的な研究資料としてはもちろんのこと、郷土の歴史と文化の究明に役立つことができれば幸いです。

最後になりましたが、調査から報告書刊行にあたり、関係者の皆様からいただいたご協力とご支援に対しまして、心から厚く御礼を申し上げます。

令和5年2月

土浦市教育委員会
教育長 入野 浩美

例言

1. 本書は、宅地造成に伴い埋蔵文化財の発掘調査が実施された、前神田遺跡第2次調査の発掘調査報告書である。
2. 調査は、有限会社エイ・エム・エー、勝田商事有限会社より委託を受けた株式会社地域文化財研究所が土浦市教育委員会の指導の下に行った。
3. 遺跡の所在地及び面積、調査期間、担当者など調査体制は下記のとおりである。

所在地 茨城県土浦市神立町字榎戸 2590 番 1 の一部

調査面積 642.74㎡

調査期間 令和4（2022）年6月20日～7月26日










調査担当者 表 豊

調査員 田代真輝 小川将之 高野浩之

調査参加者 [発掘調査] 飯野知子 大沼義則 加藤通紀 小松澤充 近野治子 佐賀 実
豊田今朝男 中島トミ子 中村 薫 藤井信彦 森永典昭 山崎一義
[整理調査] 野村浩史 遠藤恵子 木村春代 小林真千子 佐野 彩 依道徳子
藤井陽子 増田香理

4. 整理調査及び本書の作成は、株式会社地域文化財研究所において表・小川・田代・高野が担当した。
5. 執筆分担は第1章第1節が比毛君男（土浦市教育委員会）、第1章第2節、第2章が田代、第3章が表・高野、第4章が高野である。
6. 調査記録及び出土品は、一括して土浦市教育委員会が保管・管理している。
7. 調査から本書の刊行に至るまで、下記の方々にご指導・ご協力を賜った。（敬称略・順不同）
齋藤弘道 茨城県教育庁総務企画部文化課 有限会社エイ・エム・エー 勝田商事有限会社
武智測量設計株式会社 陽なたハウス

凡例

1. 調査において使用した略号は以下のとおりである。
前神田遺跡第2次調査…KMS2
竪穴建物跡：SI 掘立柱建物跡：SB 土坑・陥し穴状遺構：SK ビット：P 攪乱：K
2. 遺構図は国家標準直角座標Ⅸ系（世界測地系）を基準に作成し、方位は座標北を示す。
3. 遺構図における土層説明で、微・少・中・多量は土層内における含有物の割合を4区分したものであり、それぞれ、微量は1～5%未満、少量は5%以上～15%未満、中量は15%以上～30%未満、多量は30%以上を示す。
4. 遺構・遺物の色調表記は『新版標準土色帖 2018年版（財団法人日本色彩研究所ほか）』を使用した。
5. 遺構実測図・遺物実測図中の網掛け及び線種は下記のとおりである。
被熱範囲・焼土範囲… カマド構築土（粘土）範囲… 硬化面範囲…
推定範囲… 攪乱範囲… 繊維土器（断面）…
須恵器（断面）… 灰釉陶器（断面）… 黑色処理…
6. 出土遺物観察表中の計測値は（ ）が復元値、〈 〉が残存値を示す。単位はcmで重量はgである。
7. 遺物番号は本文、挿図、写真図版共に一致している。
8. 遺構図中の●は土器・土製品、▲は石製品、■は鉄製品を表す。

目次

本文目次

序 例言 凡例 目次	第2節 概要	5
第1章 調査経緯と経過	第3節 竪穴建物跡	5
第1節 調査に至る経緯	第4節 掘立柱建物跡	22
第2節 調査の経過と調査方法	第5節 土坑・陥し穴状遺構	26
第2章 環境	第6節 ビット	28
第1節 地理的環境	第7節 遺構外出土遺物	29
第2節 歴史的環境	第4章 まとめ	30
第3章 遺構と遺物	写真図版	
第1節 基本層序	抄録	5

挿図目次

第1図 確認調査トレンチ配置図	第13図 SI3 出土遺物	第25図 SK1
第2図 周辺遺跡分布図	第14図 SI4 (1)	第26図 SK2, 出土遺物
第3図 調査地点位置図	第15図 SI4 (2) 出土遺物	第27図 SK3
第4図 基本層序	第16図 SI5	第28図 SK4
第5図 調査区全体図	第17図 SI5 出土遺物 (1)	第29図 SK5
第6図 SI1	第18図 SI5 出土遺物 (2)	第30図 SK6, 出土遺物
第7図 SI1 出土遺物 (1)	第19図 SI6, 出土遺物 (1)	第31図 SK7
第8図 SI1 出土遺物 (2)	第20図 SI6 出土遺物 (2)	第32図 P1～7, P7 出土遺物
第9図 SI2	第21図 SI7, 出土遺物	第33図 遺構外出土遺物
第10図 SI2 出土遺物	第22図 SB1	第34図 墨書土器集成
第11図 SI3 (1)	第23図 SB2, 出土遺物	
第12図 SI3 (2)	第24図 SB3	

表目次

第1表 周辺の遺跡一覧表	第6表 SI5 出土遺物観察表	第11表 SK6 出土遺物観察表
第2表 SI1 出土遺物観察表	第7表 SI6 出土遺物観察表	第12表 ビット一覧表
第3表 SI2 出土遺物観察表	第8表 SI7 出土遺物観察表	第13表 P7 出土遺物観察表
第4表 SI3 出土遺物観察表	第9表 SB2 出土遺物観察表	第14表 遺構外出土遺物観察表
第5表 SI4 出土遺物観察表	第10表 SK2 出土遺物観察表	

写真目次

PL.1 調査区全景 調査区全景 調査前現況 基本層序 調査区中央遺構検出状況
PL.2 SI1 全景 同土層断面 同遺物出土状況 同カマド近景 同カマド土層断面 同掘り方全景 SI2 全景 同土層断面
PL.3 SI2 遺物出土状況 同遺物出土近景 同カマドA近景 同カマドA土層断面 SI3 全景 同土層断面 同遺物出土状況 同カマドA近景
PL.4 SI3 カマドA土層断面 同カマドB近景 SI4 全景 同土層断面 同遺物出土状況 同遺物出土近景 同カマド全景 同カマド土層断面
PL.5 SI4 第1期使用面全景 SI5 全景 同土層断面 同遺物出土状況 同遺物出土近景 同遺物出土近景 同カマド全景 同カマド土層断面
PL.6 SI6 全景 同遺物出土状況 同遺物出土近景 SI7 全景 同土層断面 SB1 全景 同P2土層断面 SB2 全景
PL.7 SB2P5土層断面 同P7土層断面 SB3 全景 同P3土層断面 同P5土層断面 SK1 全景 SK2 全景 SK3 全景
PL.8 SK3土層断面 SK4 全景 SK5 全景 同土層断面 SK6 全景 同土層断面 SK7 全景 同土層断面
PL.9 SI1・2 出土遺物
PL.10 SI3・4・5 (1) 出土遺物
PL.11 SI5 (2) 出土遺物
PL.12 SI6・7, SB2, SK2・6, P7, 遺構外出土遺物

第1章 調査経緯と経過

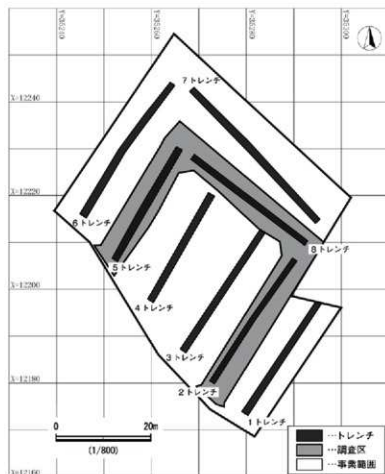
第1節 調査に至る経緯

当調査は、有限会社エイ・エム・エー（取締役 比氣洋明）と勝田商事有限会社（代表取締役 勝田達也）が共同事業者として計画する宅地造成に伴う、記録保存を目的とした発掘調査である。

当計画地は、別の事業者によって令和3年5月7日に土浦市教育委員会（以下市教委）に埋蔵文化財の取扱についての照会があった。計画地全体が周知の遺跡前神田遺跡に該当することから、令和3年6月17、18、20日に試掘確認調査を実施し、堅穴建物13棟などを確認した。その後、当事業者に事業内容が引き継がれ、事業者・市教委間で埋蔵文化財取扱の協議を行った。協議の結果、宅地部分については盛土による地下保存、市道移管予定の引き込み道路は事業者の費用負担協力による発掘調査を実施することで合意を得た。調査体制については、民間発掘調査組織に委託され、事業者・民間発掘調査組織の二者の業務委託契約書が令和4年5月12日に締結され、市教委・事業者・民間発掘調査組織の三者による埋蔵文化財保存協定書が令和4年5月20日に締結された。以下、行政上の手続等を記す。

文化財保護法第93条に基づく埋蔵文化財発掘の届出は、令和4年5月11日付土教委発第542号にて茨城県教育委員会（以下県教委と略）に達達し、5月20日付文第513号にて引き込み道路に発掘調査を実施し、その他の工事は市教委が立ち会うよう県教委が通知を行った。

続いて、文化財保護法第92条に基づき5月20日付土教委発第579-1号により県教委に発掘調査の報告を行った。調査は令和4年6月20日から開始し、7月26日まで行った。8月10日付土教委発第816号により発掘調査終了の確認を依頼し、県教委は8月18日付文第1571号にて調査終了を確認した。埋蔵物発見届は7月28日付で土浦警察署に提出した。整理作業は令和4年8月から令和5年1月まで実施した。



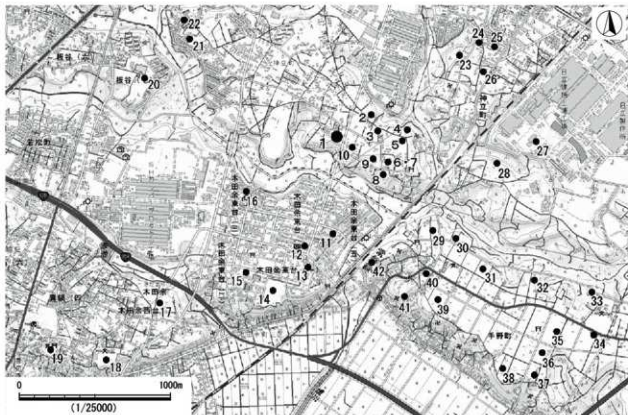
第1図 確認調査トレンチ配置図

第2節 調査の経過と調査方法

発掘調査は令和4年(2022)6月20日より調査を開始した。休憩施設・駐車場等の環境整備や安全対策・防塵対策を行った後、速やかに遺構検出に着手して、22日に終了した。23日からは各遺構の覆土掘削を開始し、土層断面の観察と実測、遺物出土状況の写真撮影と遺物の取り上げ、全景写真撮影へと進めた。7月21日にドローンによる調査区全景の空撮を行い、26日に土浦市教育委員会の終了確認を受け、現場における発掘調査を終了した。整理調査は、発掘調査終了後の7月下旬より開始した。遺物の水洗いから着手し、注記作業、接合を行い、遺物を抽出した。その後、遺物の実測と遺構実測図のトレース作業へ入る。8月中旬に報告書編集作業を中心に進め、令和5年2月、報告書の刊行に至った。

発掘調査は、遺構検出面まで重機を用いて慎重に表土除去を行った。その後、遺構の掘り下げは人力で進めた。遺構の掘り下げに際し、堅穴建物跡は4分割、土坑・ピットは2分割を基本とした土層観察用のベルトを設け堆積状況を記録した。出土遺物は、現位置での記録を基本としながら、微細な破片については分割した区域で一括し、さらに深さのある遺構の場合は層位ごとに取り上げた。記録は、25cm 間隔の等高線による1:200縮尺の全体図、遺構は、1:10と1:20縮尺を基本に図面を作成した。写真撮影は、35mmの白黒フィルム及びカラーリバーサルフィルムを用いて行い、補助にデジタルカメラを用いた。

整理調査は、遺物収納箱10箱の出土遺物を対象に実施した。遺物は全て水洗いし、注記は遺跡略号、出土遺構・地点の順で行った。土器の接合にはセメダインCを用いた。実測は遺構に伴うものを基本に100点を抽出している。遺物写真は高解像度デジタルカメラ(2400万画素)を使用し、実測遺物全てを撮影した。報告書の編集作業はDTPにより進めた。これらの成果品は、図面・写真・遺物の台帳を作成し、記録の内容や日付など必要事項を記載して返還した。



第2図 周辺遺跡分布図

第2章 環境

第1節 地理的環境

前神田遺跡の所在する土浦市は、茨城県の南部に位置する。市の東部は土浦入りで霞ヶ浦に接し、北部に新治台地、南部に筑波・稲敷台地を有し、市内中央では台地を二分するように桜川の沖積低地が広がる。河川流域では谷津が発達しており、台地を樹枝状に浸食しながら複雑な地形を形成している。

前神田遺跡は、JR常磐線神立駅から南西へ約2.5km付近に位置し、土浦市神立町に所在する。遺跡は境川左岸の新治台地上にあり、標高は25～26mである。遺跡が立地する台地は、東側と南西側を谷津に挟まれており、舌状台地を形成している。低地との高低差は約17mである。

第2節 歴史的環境

本遺跡が立地する新治台地上には、旧石器時代から近世に至る遺跡が、数多く分布している。ここでは、本遺跡周辺の遺跡について時代別に概観したい。

旧石器時代では、宝積遺跡（11）で石器集中地点が検出されており、珪質頁岩製の削器や安山岩の剥片が確認された。

縄文時代草創期では、ゴリン山遺跡（33）で早期の夏島式土器とともに無文土器が出土している。早期では、原ノ内遺跡（32）で田戸下層式期の炉穴が2基確認されている。前期では一丁田台東遺跡（16）、根本西遺跡（28）で黒浜式期から浮島式期の土器が出土している。中期の東台遺跡（13）、御冥遺跡（14）では、堅穴住居跡と100基を超える土坑が検出されている。神立遺跡（26）においても加曾利EⅡ式期を中心とした堅穴住居跡、土坑が検出され、土坑からは貝集中地点が確認されている。一部の堅穴住居跡からは石囲炉が検出されており、地床炉が一般的である土浦市域において特筆される。神立平遺跡（27）は後期前葉から晩期中葉まで続いた拠点集落跡であり、土偶を中心とした祭祀遺物が多数出土している。

第1表 周辺の遺跡一覧表

番号	遺跡名	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良	中世	近世	番号	遺跡名	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良	中世	近世
1	前神田遺跡								22	風冷遺跡							
2	松山遺跡		○		○		○		23	セイベイ山遺跡	○						
3	神立八幡遺跡		○						24	新田遺跡	○						
4	青木遺跡					○			25	原口遺跡	○						
5	天神平遺跡				○	○			26	神立遺跡			○	○	○	○	
6	坪内遺跡		○						27	神立平遺跡	○						
7	坪内貝塚								28	根本西遺跡	○				○		
8	花輪遺跡		○						29	五斗落遺跡	○	○	○	○	○		
9	蟹久保遺跡		○						30	大塚遺跡	○	○	○	○	○		
10	中浜遺跡		○				○		31	奔ノ内遺跡	○	○	○		○	○	
11	宝積遺跡	○	○	○	○	○		○	32	原ノ内遺跡	○			○			
12	東台古墳群					○			33	ゴリン山遺跡	○						○
13	東台遺跡		○	○	○				34	手野原口遺跡	○				○	○	
14	御冥遺跡		○		○				35	八坂東遺跡				○			
15	松賀東遺跡		○	○	○				36	宿後貝塚					○	○	
16	一丁田台東遺跡		○						37	平遺跡					○		
17	八坂前遺跡				○				38	手野天神遺跡	○		○	○	○	○	
18	東真鍋八坂前遺跡		○						39	上大津西小学校前遺跡				○			
19	大宮前遺跡		○			○	○		40	手野宮脇遺跡				○	○		
20	東山台地遺跡			○					41	土塚古墳				○			
21	風冷南遺跡		○						42	立遺跡	○	○	○	○	○		

さらに後期後半以降、製塩土器の出土数が増加し、製塩関連と推定される土坑も検出されている。

弥生時代では、中期まで集落は確認されておらず、集落が出現し始めるのは、後期に入ってからである。弁ノ内遺跡(31)では後期前半の建物跡が確認されている。このほか、東台遺跡、宝積遺跡において後期の上稲古式期の堅穴建物跡が検出されている。宝積遺跡では一辺8mを超える大型の堅穴建物跡も確認されており、当時の集落構造について注目される。

古墳時代の当地周辺地域では、大集落が出現し、古墳も築造される。集落の時期をみると、宝積遺跡で90軒を超える前・中期の堅穴建物跡が発見されている。後期に入ると初買場遺跡(15)で多数の堅穴建物跡が検出され、平安時代に続く大集落の存在が確認された。墓域としては、木田余台に後・終末期の東台古墳群(12)が存在しており、19基の墳丘が確認されている。

奈良・平安時代の律令制下における当地周辺は常陸国茨城郡に属していた。初買場遺跡、宝積遺跡、五斗落遺跡(29)、大儘遺跡(30)において堅穴建物跡が確認され、石橋北遺跡(地図外)では掘立柱建物跡が検出されている。特に石橋北遺跡では堅穴建物跡とほぼ同数の52棟もの掘立柱建物跡が見つかっており、灰釉陶器も多数出土している。この時期の土浦周辺遺跡の特徴として掘立柱建物を伴う集落が多いこと、灰釉陶器が出土することが挙げられる。一方で長峯遺跡(地図外)からは、寺院跡と考えられる掘立柱建物跡が見つかっており、墨書土器も多数出土している。これらの中には「国厨」と記された墨書土器が見つかっており、国厨との関連が示唆される。また、当地周辺の台地上では火葬墓が検出されるようになり、民間への仏教の広がりが確認される。初買場遺跡と宝積遺跡では蔵骨器が出土している。

なお本遺跡では、令和2年12月3日から15日までの間、市道1級5号線(西)改良工事に伴い、第1次発掘調査を実施している。調査区は今回の調査区に南面する東西方向の市道拡幅部分で、平安時代の堅穴建物跡5棟のほか、掘立柱建物跡1棟、土坑1基、不明遺構1基が確認されている。

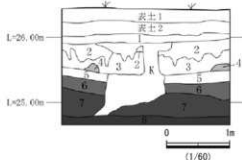


第3図 調査地点位置図

第3章 遺構と遺物

第1節 基本層序

基本層序は、A3グリッド内にテストピットを1か所設定し観察を行った。表土層は現代の耕作土である。1層（Ⅱc層）は暗褐色土層である。2層（Ⅲ層）上面が遺構検出面でソフトローム層、3層（Ⅳ層）以下はハードローム層となる。遺構が構築されていたのはハードローム層中である。4層（Ⅴ層）は第1暗色帯、5層（Ⅵ層）は始良Tn火山灰に由来すると考えられる火山ガラス質粒子が僅かではあるが確認できたため、AT層に相当すると考えられる。6層（Ⅶ層）は第2暗色帯上部、7層（Ⅸa層）は第2暗色帯下部上層である。8層（Ⅸb層）は第2暗色帯下部下層である。



- 表土1 無暗褐色土 7.5YR2/2.
表土2 暗褐色土 7.5YR2/2.
1. Ⅱc層 暗褐色土 7.5YR3/3 締り・粘性弱。
2. Ⅲ層 褐色土 7.5YR4/4 締り・粘性弱。
3. Ⅳ層 黄褐色土 10YR5/6 締り強、粘性弱。
4. Ⅴ層 ぶい黄褐色土 10YR5/4 締り強、粘性弱。
5. Ⅵ層 褐色土 10YR4/6 火山ガラス質粒子・褐色粒微量含む。締り強、粘性弱。
6. Ⅶ層 褐色土 10YR4/4 褐色粒微量含む。締り強、粘性弱。
7. Ⅸa層 ぶい黄褐色土 10YR5/3 白色粒微量含む。締り強、粘性弱。
8. Ⅸb層 ぶい黄褐色土 10YR5/4 白色粒微量含む。締り・粘性強。

第4図 基本層序

第2節 概要

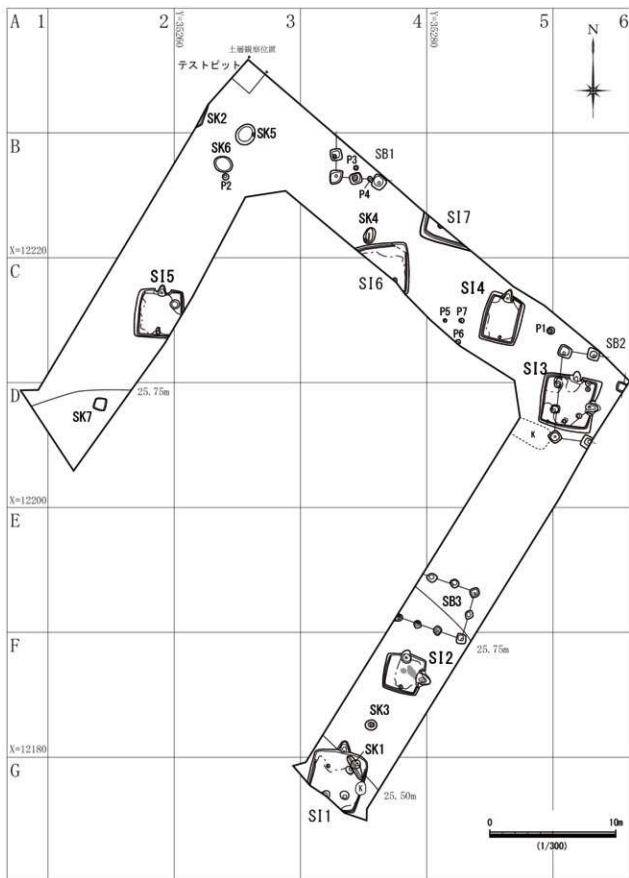
調査は遺跡の中央の東側部分で実施し、縄文時代の陥し穴状遺構1基、平安時代の竪穴建物跡7軒、掘立柱建物跡3棟、土坑6基、ピット7基が検出された。このうち、竪穴建物跡1軒は焼失家屋と考えられる。

縄文時代の遺物は、土器が1181g（51点）が出土した。内訳は、土器が縄文時代前期末葉の十三菩提式10g、前期末葉の粟島台式50g、中期中葉の阿玉台Ⅳ式71g、中期後葉の加曾利EⅣ式56g、後期前葉の綱取式系24g。土製品は土器片錘が465g（1点）出土した。平安時代の遺物は、土器を主体とするが、巡方や墨書土器の出土は特筆される。土師器は36662g（1973点）、須恵器は29783g（1122点）、灰軸陶器567g（9点）、瓦100g（3点）。土製品は管状土錘83g（2点）、紡錘車57g（1点）、羽口45g（2点）。石製品は巡方265g（1点）、紡錘車44g（1点）。鉄製品は鉄鎌11g（1点）、鎌61g（1点）、不明鉄製品15g（2点）。鉄滓262g（4点）である。

第3節 竪穴建物跡

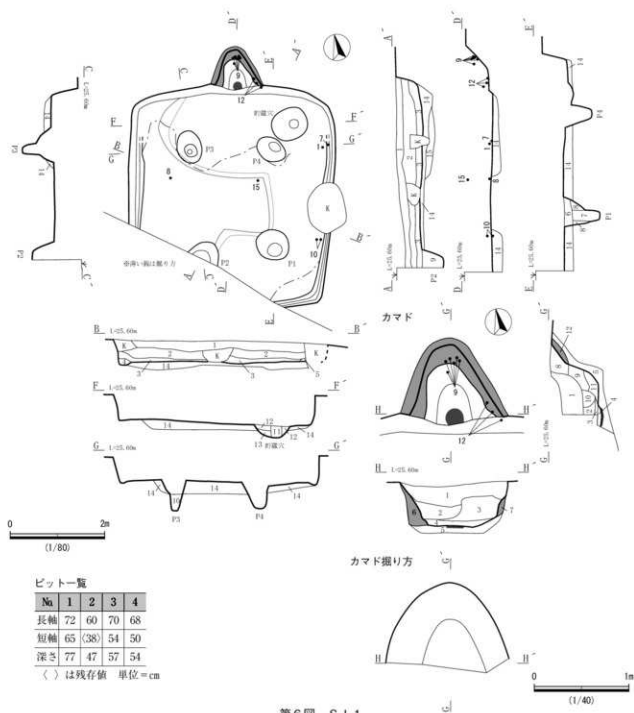
S11（第6・7・8図、第2表、PL2・9）

位置 F・G4グリッドに位置し南西隅が調査区外になる。北東隅ではSK1と重複し、本遺構が新しい。規模 南北軸4.72m、東西軸4.40mの方形を呈する。主軸方向 N-15°-Eを示す。壁 残存高は40~58cmで垂直に立ち上がり、北壁際を除いて壁溝が確認されている。床 ほぼ平坦で、カマド前面を除いた全域に硬化面が認められた。掘り方は西側での掘り込みが顕著で、全体にローム・焼土・粘土ブロックを含んだぶい黄褐色土・褐色土で貼り床が施されている。貯蔵穴 北東側で確認されている。南北軸64cm、東西軸78cmで方形状を呈し、深さは29cmを測る。覆土は、ロームブロックを含んだ暗褐色土を主体としている。ピット 4基が確認され、いずれも配置から主柱穴とみられる。覆土は褐色土主体で締りが弱い。カマド 北壁中央部に設けられている。全長は97cmで煙道部は屋外へ80cm掘り込まれて



第5図 調査区全体図

いる。燃焼部幅は40cmで袖部は残存せず、燃焼部入口の左側に須恵器甕（第7図12）が貼り付けられていた。覆土 暗褐色土を主体とし、ロームブロックとともに焼土・粘土ブロックも混在することから人為的堆積と考えられる。遺物 土師器626点（10,990g）、須恵器270点（6,906g）、灰軸陶器2点（58g）、管状土鍾2点（83g）、輪羽口とみられる破片1点（20g）、不明鉄片1点（10g）などが出土した。土師器は煮沸具のみである。一方で、供膳具は須恵器のみであるが、坏が主体で蓋や有台器種は少量に留まる。所見 出土した遺物の傾向として、土師器に供膳具が認められないこと、須恵器では坏が中心であるものの蓋の出土が減少していること、図示はできなかったが高台付甕が残存していることがあげられる。これにより遺物は9世紀中葉～後半の様相を呈し、この時期に本遺構は埋没したと考えられる。



第6図 S11

土層説明

1. 暗褐色土 75YR3/4 ローム粒 ϕ 1~10mm中量, 焼土粒 ϕ 1~5mm少量, 炭化物粒微量, 締りあり, 粘性弱。
2. 暗褐色土 75YR3/3 ローム粒・ロームブロック ϕ 1~20mm少量, 焼土粒 ϕ 1~5mm少量, 粘土粒 ϕ 1~5mm少量, 締りあり, 粘性弱。
3. 暗褐色土 75YR3/3 ロームブロック ϕ 5~20mm少量, 焼土粒 ϕ 1~5mm少量, 締りあり, 粘性ややあり。
4. 褐色土 10YR4/4 ローム粒中量, 締りあり, 粘性ややあり。
5. 灰褐色土 75YR4/2 焼土粒 ϕ 3~10mm微量, 灰を含む, 締り・粘性弱。
6. 暗褐色土 75YR3/4 ローム粒 ϕ 1~3mm微量, 炭化物粒微量, 締り・粘性弱。
7. 褐色土 75YR4/3 ローム粒 ϕ 1~3mm少量, 締りなし, 粘性弱。
8. 褐色土 75YR4/3 ローム粒 ϕ 1~5mm中量, 締り・粘性弱。

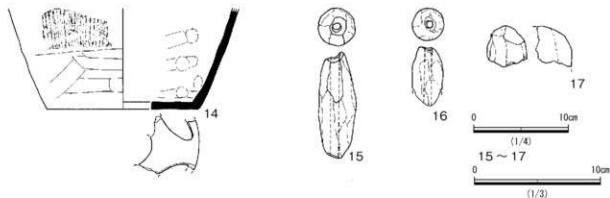
カマド土層説明

1. 褐色土 10YR4/4 焼土粒 ϕ 1~5mm少量, 粘土粒 ϕ 1~5mm中量, 締り・粘性弱。
2. におい黄褐色土 10YR4/3 焼土粒 ϕ 1~10mm中量, 粘土粒 ϕ 1~5mm少量, 締り・粘性弱。
3. におい黄褐色土 10YR3/3 焼土粒 ϕ 1~10mm中量, 粘土粒 ϕ 1~5mm少量, 締り・粘性弱。
4. 赤褐色土 5YR4/6 焼土粒 ϕ 1~3mm多量, 粘土粒 ϕ 1mm微量, 締り・粘性弱。
5. 褐色土 10YR4/4 焼土粒 ϕ 1mm微量, 粘土粒 ϕ 1mm微量, 締り・粘性弱。
6. 黄褐色土 10YR5/6 焼土粒 ϕ 1~10mm少量, 粘土粒 ϕ 1~5mm中量, 締り・粘性弱。
7. におい黄褐色土 10YR6/4 焼土粒 ϕ 1~10mm少量, 粘土粒 ϕ 1~5mm中量, 締り強, 粘性弱。
8. 褐色土 10YR4/6 焼土粒 ϕ 1~3mm微量, 粘土粒 ϕ 1~3mm少量, 炭化物粒微量, 締りあり, 粘性弱。
9. におい赤褐色土 2.5YR4/4 焼土粒多量, 炭化物粒微量, 締り・粘性弱。
10. におい赤褐色土 5YR4/4 焼土粒 ϕ 1~5mm多量, 締り・粘性弱。
11. 灰褐色土 5YR4/2 焼土粒少量, 灰を多量含む, 締り・粘性弱。
12. 灰赤褐色土 5YR3/6 焼土粒少量, 締りあり, 粘性弱。

9. 暗褐色土 75YR3/4 ローム粒 ϕ 1~3mm微量, 締り・粘性弱。
10. 褐色土 75YR4/3 ローム粒 ϕ 1~10mm中量, 焼土粒 ϕ 1~3mm微量, 締り・粘性弱。
11. 暗褐色土 75YR3/4 ローム粒 ϕ 1~5mm少量, 締り・粘性弱。
12. 暗褐色土 75YR3/4 ローム粒・ブロック ϕ 3~20mm少量, 焼土粒 ϕ 1~3mm微量, 締り・粘性弱。
13. 褐色土 75YR4/3 ローム粒 ϕ 1~5mm中量, 締り・粘性弱。
14. 褐色土 10YR4/4 ローム粒少量, ロームブロック ϕ 5~20mm微量, 焼土粒 ϕ 1~5mm中量, 粘土粒 ϕ 1~10mm少量, 締り・粘性あり。
15. におい黄褐色土 10YR4/3 ローム粒 ϕ 1~10mm中量, 焼土粒 ϕ 1~3mm少量, 粘土粒 ϕ 1~5mm少量, 締り非常にあり, 粘性弱。



第7図 S11出土遺物(1)



第8図 S11出土遺物(2)

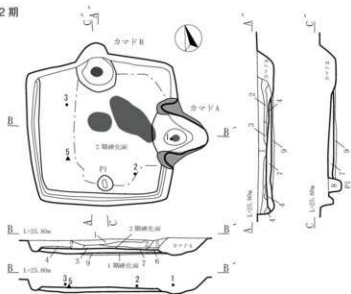
第2表 S11出土遺物観察表

種類番号	種類名称	口径・高さ・底径	残存率	胎土	焼成	色調	器形・技法上の特徴
1	須恵器 片	13.5・4.5・7.4	90%	雲母多、長石・石英多、チャート少	良好	灰黄 2.596/2	コナロ成形。体部下端手持りヘラケズリ。底部一方方向ヘラケズリ。
2	須恵器 片	12.9・5.1・6.1	70%	雲母、大粒長石・石英多、チャート少	良好	灰黄 2.596/2	コナロ成形。体部下端手持りヘラケズリ。底部一方方向の丁寧なヘラケズリ。
3	須恵器 片	13.4・4.5・6.8	80%	雲母少、長石、石英、白色粒	良好	黄灰 2.596/1	コナロ成形。コナロ目明瞭。体部下端手持りヘラケズリ。底部一方方向の丁寧なヘラケズリ。
4	須恵器 片	13.1・4.1・6.7	60%	長石・石英多、白色粒多	良好	灰黄 7.598/2	硬質。コナロ成形。体部下端手持りヘラケズリ。底部一方方向の丁寧なヘラケズリ。
5	須恵器 片	(13.6)・3.8・6.0	40%	雲母少、長石、石英	良好	黄灰 2.596/1	コナロ成形。体部下端手持りヘラケズリ。底部一方方向の丁寧なヘラケズリ。
6	須恵器 片	— (4.3)・(7.4)	—	体部下端 底面	良好	灰	硬質。コナロ成形。体部下端幅広の手持りヘラケズリ。底部一方方向の丁寧なヘラケズリ。
7	須恵器 蓋	12.4・(3.1)・—	90%	大粒長石・石英多、白色粒多	良好	灰 N4/	コナロ成形。天井部凹型ヘラケズリ。縁み部周辺ナデ。縁み径3.2cm、縁み高1.5cm
8	須恵器 蓋	(12.6)・3.0・—	70%	大粒長石・石英、白色粒	良好	灰 N5/	コナロ成形。天井部凹型ヘラケズリ。縁み部周辺ナデ。縁み径2.6cm、縁み高1.1cm
9	土師器 瓶	(23.6)・(22.0)・—	—	雲母少、長石・石英、赤褐色粒	普通	にぶい赤褐色 S981/4	口唇部ツマミ上げ。口縁部コナデ割製上半はナデ。下半は側面方向のミギキであるが、焼付が付着し、全体に調整不鮮明。内面縦方向ヘラケナデ。
10	土師器 瓶	23.0・(12.7)・—	20%	雲母、長石、石英多、赤褐色粒	普通	にぶい赤褐色 外：2.598/4 内：S985/4	口唇部ツマミ上げ。口縁部コナデ。胴部ヘラケズリ後ナデ。内面横方向ヘラケナデ。
11	須恵器 壺	23.9・(12.3)・—	—	雲母、長石・石英少	普通	灰 O4/1	口唇部ツマミ上げ。口縁部コナデ。胴部は縦方向の平行タタキ。内面は凹みがあり無文の当て具痕が。
12	須恵器 壺	37.5・23.3・18.1	30%	雲母、長石・石英多	普通	内：黄灰黄 2.595/2	口縁部は外反し。口唇部ツマミ上げ。胴部縦方向の平行タタキで、下端を手持りヘラケズリ。内面はコナデ。下端は指摺によるコナデで、上部に輪縁痕が浅。
13	須恵器 壺	(35.0)・(4.5)・—	—	口縁部片	良好	外：暗青灰 SP93/1 内：青灰 SP95/1	口縁部縁端下方へのツマミ出し。胴部縦方向の平行タタキ後。縦方向の平行タタキで梯子状になる。内面は斜方向のヘラケナデ。
14	須恵器 瓶	— (10.7)・(8.0)	—	胴下半へ底面	良好	灰 N5/	胴部縦方向平行タタキで、下部は凹へ横方向ヘラケズリ。底径は5.5とみられ孔部はヘラケズリ調整。底面無調整。内面指摺によるナデ。
15	土製品 管状土埴	長：8.4・幅：3.0 孔：0.7	—	ほぼ完形	普通	にぶい黄褐色 10987/4	重量：60.78g ヘラケズリ後ナデ。
16	土製品 管状土埴	長：(4.7)・幅：2.5 孔：0.7	40%	長石、石英、赤褐色粒	普通	にぶい黄褐色 7.5986/4	重量：22.23g 全体に丁寧なナデ。
17	土製品 羽口	長：(3.2)・幅：(2.6)	—	破片	普通	灰白 10987/1	重量：16.33g 表面無調整。

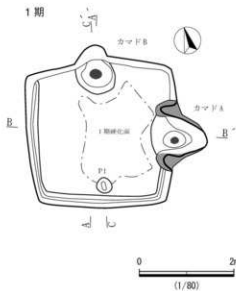
S12 (第9・10図、第3表、PL.2・3・9)

位置 F4・5グリッドに位置する。規模 南北軸3.18m、東西軸3.20mの方形を呈し、北壁と東壁でカマドが確認されている。主軸方向 北カマドを基準にするとN-15°-Eを示し、東カマドを基準にするとN-106°-Eを示す。壁 残存高は1期(旧)28cm、2期(新)23cm程度で垂直に立ち上がり、南・西壁際で壁溝が確認されている。床 平坦であるが中央が若干高くなっており、その中央から東カマド前面にかけて顕著な硬化面が認められた。全体にローム粒を多めに含んだ褐色土で貼り床が施され、貼り床下からさらにもう一面の貼床が確認された。下部の貼り床は南壁から北カマド前面にかけて硬化していた。ピット 南壁寄り中央に1基が確認されている。配置から出入口施設等に伴う柱穴の可能性がある。覆土は締りの弱い暗褐色土が主体である。主柱穴とみられるピットは確認されなかった。カマド

2期



1期



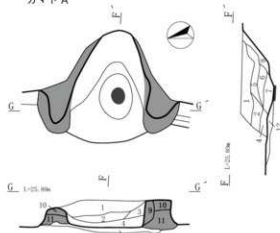
土層説明

1. にぶい褐色土 7.5YR5/3 ローム粒φ1~3mm少量、焼土粒φ1~3mm少量、締りあり、粘性弱。
2. 暗褐色土 7.5YR3/4 ローム粒φ1~5mm少量、焼土粒φ1~5mm中量、締りあり、粘性弱。
3. にぶい赤褐色土 5YR4/3 焼土粒φ1~10mm多量、炭化物粒を微量、締りあり、粘性弱。
4. 暗褐色土 7.5YR3/3 ローム粒φ1~5mm少量、焼土粒φ1~5mm少量、締りあり、粘性弱。
5. 灰褐色土 7.5YR4/2 焼土粒微量、粘土粒中量、締りあり・粘性弱。
6. 黒褐色土 7.5YR3/1 焼土粒φ1~3mm微量、締り・粘性弱。
7. 褐色土 7.5YR4/3 ローム粒φ1~3mm中量、締りあり、粘性弱。
8. 暗褐色土 7.5YR3/4 ローム粒φ1~5mm少量、焼土粒φ1~5mm微量、粘土粒微量、締り・粘性弱。
9. 灰褐色土 7.5YR4/2 ローム粒φ1~3mm少量、焼土粒φ1~5mm少量、締りあり、粘性弱。

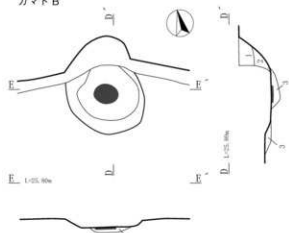
ピット一覧

No	1
長軸	34
短軸	31
深さ	28
単位	cm

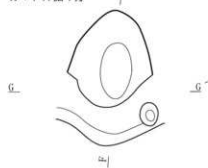
カマドA



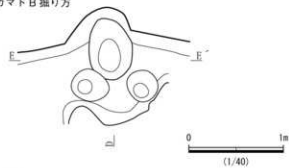
カマドB



カマドA振り方



カマドB振り方



第9図 S12

北壁中央部に設けられたカマドは、東側へ付け替えられた際に廃棄されたとみられ、屋外へ40cm掘り込まれた煙道部のみが残存し、火床部とみられる被熱面も認められた。東壁中央部に設けられたカマドは全長118cmで煙道部は屋外へ65cm掘り込まれている。燃焼部幅は70cmで、袖部は左袖45cm、右袖34cmが残存する。覆土にぶい褐色・暗褐色土が混在し、東カマド前面から中央にかけて焼土ブロックを多量に含んだにぶい赤褐色土が床面直上に広がっていた。遺物 土師器233点(4.622g)、須恵器78点(1.096g)、石製紡錘車1点(44g)が出土した。供膳具は土師器が主体となり、須恵器は坏の細片が少量みられる程度である。所見 本遺構は、床面の貼り替えから2期にわたる使用が確認された。カマドは残存状況より床面を張り替えられた際に北側から東側へ付け替えている。遺物は供膳具が須恵器から土師器に移行している時期とみられ、最終的に使用された東カマドから出土した土師器の坏(第10図1)・皿(第10図2)から、本遺構は9世紀後葉に廃棄され埋没したと考えられる。

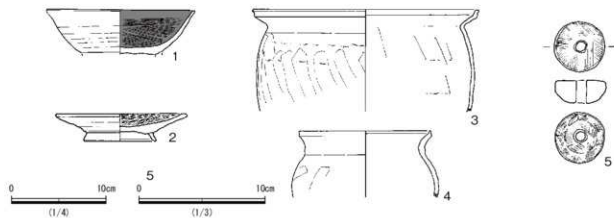
カマド土層説明

カマドA

1. にぶい黄褐色土10YR4/3 ローム粒 ϕ 1~5mm少量、焼土粒 ϕ 1~5mm少量、粘土粒 ϕ 1~10mm中量。縞りあり、粘性なし。
2. 暗褐色土10YR3/3 ローム粒 ϕ 1~10mm少量、焼土粒 ϕ 1~10mm微量、粘土粒 ϕ 1~3mm微量、炭化物粒極微量。縞りあり、粘性弱。
3. にぶい黄褐色土10YR5/2 焼土粒 ϕ 1~10mm少量、粘土粒 ϕ 1~3mm多量、炭化物粒極微量。縞りあり、粘性弱。
4. 暗赤褐色土5YR3/2 ローム粒極微量、焼土粒 ϕ 1~3mm微量。炭化物粒極微量。縞り・粘性弱。
5. にぶい赤褐色土5YR4/3 焼土粒 ϕ 1~10mm少量、粘土粒・アロップ ϕ 1~20mm少量、炭化物粒微量。縞り・粘性弱。
6. にぶい赤褐色土5YR4/4 焼土粒 ϕ 1~5mm少量。縞り・粘性弱。
7. にぶい赤褐色土5YR4/4 焼土粒 ϕ 1~10mm少量、炭化物粒微量。縞り・粘性弱。
8. 褐色土7.5YR4/6 ローム粒 ϕ 1~3mm多量。縞り、粘性弱。
9. 灰褐色土5YR6/2 焼土粒 ϕ 1~10mm微量、粘土粒 ϕ 1~3mm多量。縞り非常にあり、粘性なし。
10. にぶい黄褐色土10YR5/3 焼土粒 ϕ 1~10mm微量、粘土粒 ϕ 1~5mm多量。縞り非常にあり、粘性なし。
11. 暗褐色土7.5YR3/4 ローム粒 ϕ 1~3mm微量、焼土粒 ϕ 1~3mm微量。縞りあり、粘性弱。
12. 褐色土7.5YR4/3 ローム粒 ϕ 1~5mm少量。縞りあり、粘性弱。

カマドB

1. 褐色土10YR4/4 焼土粒 ϕ 1~3mm中量。縞りあり、粘性弱。
2. 褐色土7.5YR4/3 ローム粒 ϕ 1~5mm微量、焼土粒 ϕ 1~3mm微量。縞り・粘性弱。
3. 暗褐色土7.5YR3/3 焼土粒 ϕ 1~5mm少量。縞り・粘性弱。



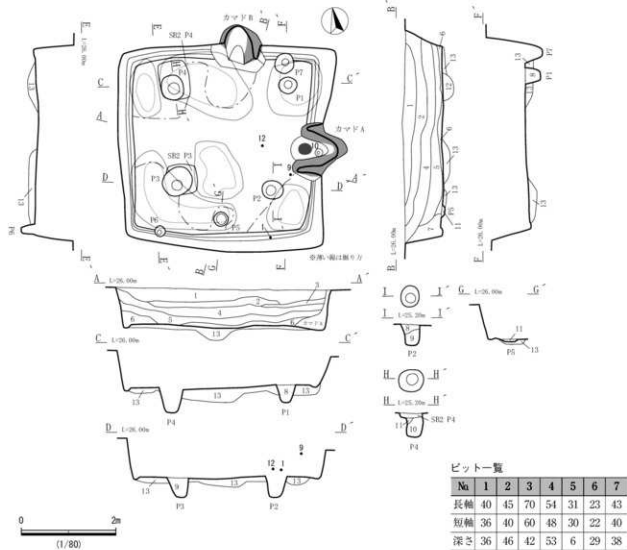
第10図 S12出土遺物

第3表 S12出土遺物観察表

種類番号	種類・器種	口径・器高・底径	残存率	胎土	胎成	色調	器形・技法上の特徴
1	土師器 高台付坏	15.7・(4.8)・—	90%	雲母多、長石、石英	普通	にぶい焼 7.5YR5/4	高台部欠損。口縁成形。底部凹陥ヘラケズリで高台部周縁ナズ。内面黒色処理で、底部一方向ミダキ後に、体部横方向のミダキ。
2	土師器 高台付皿	13.9・2.9・7.7	90%	雲母多、長石、石英	普通	にぶい焼 7.5YR5/4	口縁部の一箇欠陥。口縁成形。底部凹陥ヘラケズリで、高台部周縁付後ナズ。内面底部一方向ミダキ後に体部横方向のミダキ。
3	土師器 甕	24.0・10.8・—	口縁部へ 側面上半	雲母、長石、石英	普通	にぶい赤焼 5YR5/4	口部部アツキ上げ、口縁部ココナズ。胴部縦方向ヘラケズリ。内面横方向ヘラケズリ。工具痕が現る。内外面ともに輪轆痕が現る。
4	土師器 小型甕	(14.0)・(7.0)・—	口縁部へ 胴上部	雲母、長石多、石英	普通	にぶい赤焼 5YR5/3	口部部アツキ上げ、口縁部へ傾部ココナズ。胴部内外面ともにナズ。
5	石製品 紡錘車	径：4.0・厚：1.8 孔：0.8	完形	—	—	灰オリーブ 5Y4/2 オリーブ黒 5Y3/2	重量：43.71g。石材：不明 全体を磨り込み、右側状に成形。光沢があり、表面を滑沢のものにてコーティング状。

S13 (第11・12・13図、第4表、PL3・4・10)

位置 C5・6、D5・6グリッドに跨って位置する。SB2を構成する2基の柱穴と重複し、本遺構が古い。
規模 南北軸4.40m、東西軸4.50mの方形を呈し、北壁と東壁でカマドが確認されている。主軸方向
北カマドを基準にするとN-10°-Eを示し、東カマドを基準にするとN-100°-Eを示す。壁 残存
高は75~85cmで垂直に立ち上がり、壁溝が全周する。床 ほぼ平坦で、北カマド前面と北東隅以外の
四隅を除き硬化面が認められた。掘り方は浅く、ローム粒を多量に含んだ明褐色土で貼り床が施されてい

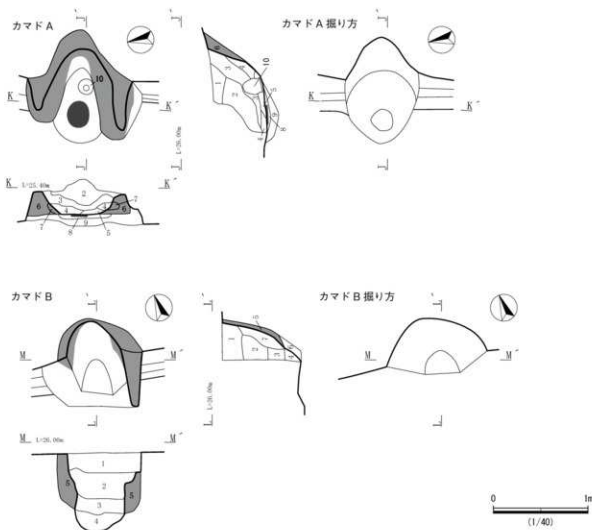


土解説明

1. 暗褐色土75YR3/4 ローム粒φ1~10mm少量、焼土粒φ1~5mm少量、粘土粒φ1~5mm少量。締りあり、粘性弱。
2. 暗褐色土75YR3/4 ローム粒φ1~10mm少量、焼土粒φ1~10mm中量、粘土粒φ1~5mm少量。締りあり、粘性弱。
3. 褐色土75YR4/3 ローム粒φ1~5mm少量、粘土粒少量。締り・粘性弱。
4. 暗褐色土75YR3/4 ローム粒φ1~3mm微量、焼土粒φ1~5mm少量、粘土粒φ1~5mm少量。締り・粘性弱。
5. 暗褐色土75YR3/4 ローム粒φ1~5mm微量、焼土粒φ1~5mm微量、粘土粒・プロッタφ1~15mm中量。締り・粘性弱。
6. 暗褐色土75YR3/4 ローム粒φ1~5mm少量。締り・粘性弱。
7. 褐色土75YR4/6 ローム粒φ1~5mm多量。締り・粘性弱。
8. 暗褐色土75YR3/3 ローム粒微量、焼土粒φ1~3mm微量。締り・粘性弱。
9. 褐色土75YR4/3 ローム粒φ1~3mm中量。締り・粘性弱。
10. 暗褐色土75YR3/4 ローム粒φ1~3mm少量。締り・粘性弱。
11. 褐色土75YR4/4 ローム粒φ1~3mm中量。締り・粘性弱。
12. 暗褐色土10YR3/4 焼土粒φ1~5mm中量、粘土粒φ1~5mm少量。締りあり、粘性弱。
13. 明褐色土7.5YR5/6 ローム粒多量。締り非常に強い、粘性弱。

第11図 S13 (1)

る。ピット 7基が確認され、P1～4は規模から主柱穴とみられる。P5は南壁寄り中央にあり、配置から出入口施設等に伴う柱穴の可能性がある。P6・7は壁際に確認され、補助柱穴として用いられたと考えられる。覆土は締りの弱い暗褐色・褐色土が主体となっている。カマド 北壁中央部に設けられたカマドは、東側へ付け替えられた際に廃棄されたとみられ、屋外へ50cm掘り込まれた煙道部のみが残存する。東壁中央部に設けられたカマドは全長120cmで煙道部は屋外へ40cm掘り込まれている。燃焼部幅は48cmで、袖部は左袖45cm、右袖62cmが残存する。覆土 暗褐色・褐色土が主体で、含有物も少量であることから自然堆積と考えられる。下層ほど締りが弱くなる。7層は壁からの崩落層とみられる。遺物 土師器175点(4,690g)、須恵器156点(3,786g)、時期不明の陶器片1点(5g)が出土した。供膳具は須恵器が主体となり、土師器は細片が認められる程度である。土師器皿(第13図12)とした遺物は焼成前に破損した甕の底部片を二次利用している。須恵器円面硯は脚部の細片であるが、覆土下層から出土している。所見 本遺構は、カマドの付け替えから2期にわたる使用が確認された。カマドは残存状況より上部床面を張り替えた際に北側から東側へ付け替えている。遺物は供膳具が須恵器主体であること、盤や蓋が少量ながら認められることなどの出土傾向から、S I 1とさほど時期差はないと考えられるが、床直上から出土した須恵器坏、東側カマドから出土した土師器甕は他よりも古相のものと思われる。遺構が他よりも深かったことを考慮すると、9世紀前葉に廃棄され、中葉にかけて埋没したと考えられる。

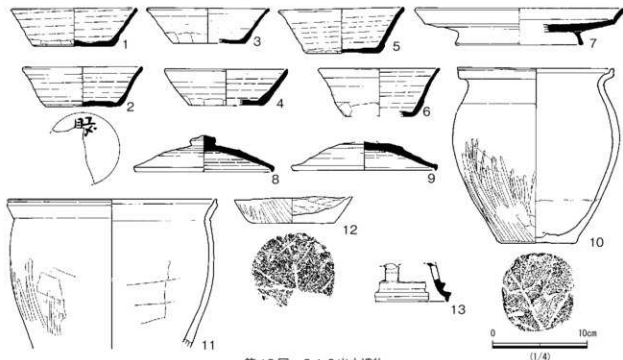


第12図 S I 3 (2)

カマド土層説明
カマドA

1. 灰褐色土 75YR4/2 ローム粒φ1~3mm微量、焼土粒φ1~3mm微量、粘土粒φ1~3mm少量、炭化物粒微量。締り強、粘性弱。
2. 灰黄褐色土 10YR5/2 ローム粒φ3~5mm微量、焼土粒φ1~10mm微量、粘土粒φ1~3mm多量、締り・粘性強。
3. にぶい赤褐色土 5YR4/4 焼土粒φ1~10mm多量、炭化物粒微量。締り・粘性弱。
4. 暗赤褐色土 5YR3/2 焼土粒φ1~5mm少量、粘土粒φ1~10mm微量、炭化物粒微量。締り・粘性弱。
5. にぶい黄褐色土 10YR4/3 ローム粒φ1~3mm微量、粘土粒φ1~5mm中量、締り弱、粘性あり。
6. 暗灰色土 10YR4/1 ロームブロックφ10~20mm微量、粘土粒φ1~10mm多量。締り非常にあり・粘性なし。

7. にぶい橙色土 5YR6/3 焼土粒φ1~5mm少量、粘土粒中量。締りあり、粘性なし。
8. 褐色土 7.5YR4/3 ローム粒φ1~5mm少量、締り・粘性なし。
9. 褐色土 7.5YR4/3 ローム粒φ1~5mm少量、締りあり、粘性弱。カマドB
1. 灰褐色土 7.5YR5/2 焼土粒φ1~5mm微量、粘土粒φ1~3mm中量。締りあり、粘性弱。
2. 灰褐色土 7.5YR6/2 焼土粒φ1~3mm微量、粘土粒φ1~3mm中量。締りあり、粘性弱。
3. にぶい赤褐色土 5YR5/3 焼土粒・ブロックφ1~15mm中量、粘土粒φ1~5mm少量。締りなし、粘性弱。
4. にぶい赤褐色土 2.5YR4/3 焼土粒φ1~3mm多量。締り・粘性なし。
5. にぶい橙 7.5YR7/4 焼土粒微量、粘土粒多量。締りあり、粘性なし。
6. 褐色土 7.5YR4/3 ローム少量。締り・粘性弱。
7. にぶい赤褐色土 2.5YR4/4 焼土粒φ1~5mm中量。締り・粘性なし。



第13図 S13出土遺物

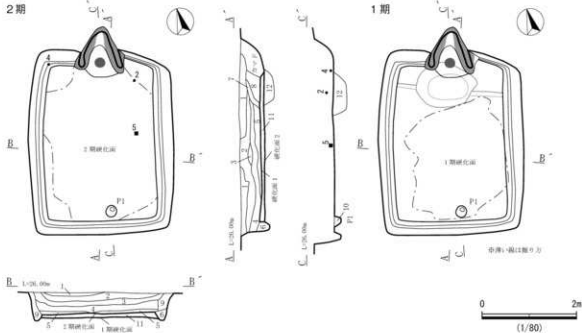
第4表 S13出土遺物観察表

発掘番号	種類 器種	口径・器高・底径	残存率	胎土	焼成	色調	器形・技法上の特徴
1	灰褐色 杯	13.4・4.0・8.4	ほぼ完全形	雲母、長石、白色粘、 チャート微	良好	灰黄 2.5Y7/2	口縁部わずかに欠損。口クロ成肌、体部下端平持ちヘラケズリ。底部周縁を不定方向の平持ちヘラケズリ。
2	灰褐色 杯	(12.8)・4.2・(7.6)	40%	雲母、長石・石英多	普通	灰黄 2.5Y6/2	口クロ成肌、底部周縁不定方向の平持ちヘラケズリで遺棄「□」あり。
3	灰褐色 杯	(13.0)・3.7・(7.5)	30%	雲母、長石、石英多、 チャート微	普通	灰黄 2.5Y6/2	口クロ成肌、体部下端平持ちヘラケズリ。底部周縁を不定方向の平持ちヘラケズリ。
4	灰褐色 杯	(13.0)・3.8・(7.8)	30%	雲母、長石・石英多、 チャート微	良好	黄灰 2.5Y5/1	口クロ成肌、体部下端平持ちヘラケズリ。底部周縁を不定方向の平持ちヘラケズリ。
5	灰褐色 杯	13.2・4.9・7.7	70%	雲母細粒、大粒石英、 長石	良好	灰白 5B6/1	軟質。口クロ成肌、体部下端平持ちヘラケズリ。底部周縁を不定方向の平持ちヘラケズリ。
6	灰褐色 杯	(12.8)・5.1・(7.4)	30%	長石・石英少、白色粘 微	良好	灰 10B5/1	整致。口クロ成肌、体部下端〜底部平持ちヘラケズリ。
7	灰褐色 高台付壺	(22.0)・3.9・(13.4)	20%	雲母、長石・石英多	良好	暗灰黄 2.5Y4/2	口クロ成肌、底部回転ヘラケズリ・高台部回転付け板ナデ。
8	灰褐色 壺	14.8・3.8・—	60%	雲母細粒、長石・石英多、 大粒チャート少	良好	灰 5B4/1	硬質。口クロ成肌、天井部回転ヘラケズリ。横み底部周縁ナデ。横み径2.7cm、縦み高1.5cm
9	灰褐色 壺	(15.4)・(12.9)・—	50%	雲母多、長石・石英多	普通	灰白 5B7/1	口クロ成肌、天井部回転ヘラケズリ。横み部欠損。
10	土師器 壺	16.5・18.5・7.8	完全形	雲母、長石・石英多	普通	にぶい黄褐 10YR5/3	口唇部ツマミ上げ、口縁部〜側面ヨコナデ。胴部上半平ナデ、下半ヘラケズリ後視方向へツマミ。底部木敷肌。内面ツマ。
11	土師器 壺	22.0・(15.7)・—	20%	雲母、長石、石英	普通	にぶい橙 7.5YR6/4	口唇部ツマミ上げ、口縁部ヨコナデ。胴部上半平ナデ、下半横方向ヘラケズリ後視方向へツマミ。内面横方向ヘラケズリ。
12	土師器 壺	12.4・2.8・8.8	90%	雲母、長石、石英、赤 褐色粘微	普通	にぶい黄褐 7.5YR5/3	胴部縦方向へツマミ。底部木敷肌。内面ヘラケズリ。口縁となる部分まで、焼成前ヘラケズリを施す。土師器製の底部と同様の形態で製作中の二次利用とみられる。
13	灰褐色 行面破	—・(4.0)・(16.0)	破片部	針状物、白色粘、黑色 粘	良好	灰 5B6/1	方形状の透かし。下部に断面三角状の突起がある。内面自然磨がかかっている。

S14 (第14・15図、第5表、PL.4・5・10)

位置 C5グリッドに位置する。規模 南北軸3.94m、東西軸3.10mの南北に長い長方形を呈する。主軸方向 N-15°-Eを示す。壁 残存高は1期(旧)55cm、2期(新)45cmで垂直に立ち上がり、壁溝が全周する。床 は平坦ではあるが若干の起伏がある。四隅を除いて硬化面が認められた。全体にロームブロックを多量に含んだ褐色土で貼り床が施され、貼り床下からさらに硬化面が確認された。下部の硬化面は直床として利用されたと考えられ、北壁側は段差を持って硬化面が途絶えていたため、北側へ拡張されていることがわかった。拡張前の規模は南北軸3.20m、東西軸3.10mの方形であった。ピット 南壁寄り中央に1基が確認されている。配置から出入口施設等に伴う柱穴の可能性もある。覆土は締りの弱い褐色土である。主柱穴とみられるピットは確認されなかった。カマド 北壁中央部に設けられている。全長は107cmで煙道部は屋外へ52cm掘り込まれ構築されている。燃焼部幅は50cmで、袖部は左袖30cm、右袖52cmが残存する。覆土 暗褐色・褐色土が主体で、含有物も少量であることから自然堆積と考えられる。下層ほど締りが弱くなる。9層は壁からの崩落層とみられる。遺物 土師器128点(1287g)、須恵器116点(2266g)、鉄鍔1点(10g)、鉄滓1点(191g)が出土した。供膳具は土師器、須恵器が同様の数量である。所見 本遺構は、北側部分の拡張された痕跡から、2期にわたり使用されていたことが確認された。遺物は供膳具が須恵器と土師器が混在しており、須恵器皿(第15図2)が認められることから、本遺構は9世紀中葉～後葉にかけて埋没したと考えられる。

2期



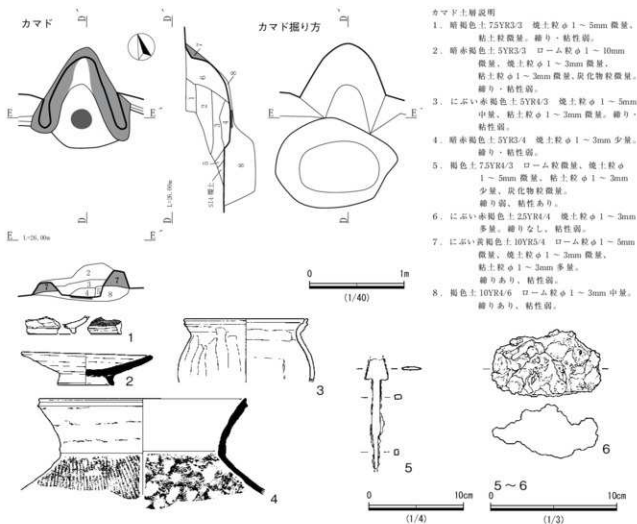
ピット一覧

No.	1
長軸	25
短軸	23
深さ	17
単位	cm

土層説明

1. 黒褐色土 7.5YR3/2 ローム粒φ1～3mm微量、炭化物粒微量。締りあり、粘性弱。
2. 褐色土 7.5YR4/3 ローム粒φ1～10mm少量、焼土粒φ1～5mm微量。締り・粘性弱。
3. 暗褐色土 7.5YR3/4 ローム粒φ1～3mm微量、焼土粒φ1～3mm微量。締り・粘性弱。
4. 暗褐色土 7.5YR3/4 ローム粒φ1～3mm少量、焼土粒φ1～3mm微量。締り・粘性弱。
5. 褐色土 7.5YR4/3 ローム粒・ブロックφ1～20mm微量。締り・粘性弱。
6. 褐色土 7.5YR4/4 ローム粒少量。締り・粘性弱。
7. 暗褐色土 7.5YR3/3 ローム粒φ1～5mm微量、焼土粒φ1～5mm少量。締り・粘性弱。
8. ぶいぶ褐色土 5YR4/4 焼土粒φ1～10mm中量、粘土粒少量。締り・粘性弱。
9. 褐色土 7.5YR4/3 ローム粒φ1～3mm中量。締り・粘性弱。
10. 褐色土 7.5YR4/3 ローム粒φ1～3mm少量。締り・粘性弱。
11. 褐色土 10YR4/4 ローム粒・ブロックφ1～20mm多量、焼土粒φ1～5mm少量、粘土粒φ1～5mm少量。締り非常に強い、粘性強。
12. 褐色土 10YR4/6 ローム粒φ1～10mm中量、焼土粒φ1～5mm微量、炭粒。締りあり、粘性弱。

第14図 S14 (1)



第15図 S14 (2)、出土遺物

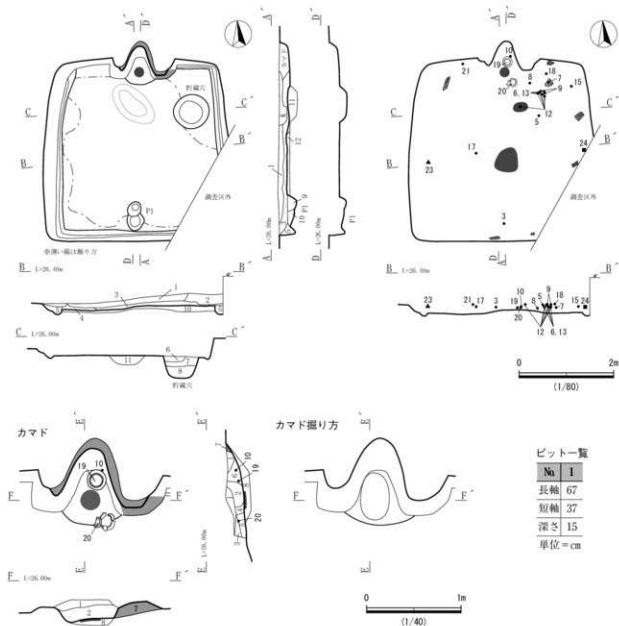
第5表 S14出土遺物観察表

検出番号	発物 器種	口径・器高・底径	残存率	粘土	焼成	色調	器形・技法上の特徴
1	土製加 高台杯	—・(1.8)・—	体部下端→ 底面片	許状物白色粘、透明 粘、黄褐色	良粒	にぶい赤褐色 5YR5/4	体部下端→ラケズリ。高台部貼り付け後ナデ。内面黒色処理 で、体部横方向、底面→方向のミガキ。
2	灰意器 高台付重	13.8・3.3・6.0	60%	雲母、長石・石英多	普通	暗灰黄 2.5Y5/2	ロクロ形成。高台部貼り付け後強くナデ。
3	土製加 小形壺	(13.1)・(6.7)・—	口縁部→胴 上半分片	雲母、長石・石英多	普通	にぶい褐 7.5YR5/3	口唇部ツマミ上げ、口縁部→側部コナデで輪縁直がツマミに 残る。胴部縦方向→ラケズリ、内面横方向→ラケナデ。
4	灰意器 壺	(22.6)・(10.1)・—	口縁部→胴 上部	雲母、長石・石英多	普通	暗灰黄 2.5Y5/2	口唇部上方ツマミ上げ、口縁部→側部コナデで輪縁直が残 る。胴部縦方向の平行タタキ。胴部内面は限定的にPPV直が 目立つ。
5	鉄製山 鍋	長：(8.7cm) 幅：1.9cm 重量：11.13g	先端部欠損				
6	鉄洋 鍋	長：5.3cm 幅：8.6cm 厚さ：4.3cm 重量：191.74g					

S15 (第16・17・18図、第6表、PL 5・10・11)

位置 C2・3グリッドに位置する。南東隅が調査区外になる。規模 南北軸392m、東西軸390mの方形を呈する。主軸方向 N-5°-Eを示す。壁 残存高は20～40cmで垂直に立ち上がり、北壁西側を除き、壁溝がほぼ全周する。床 平坦ではあるが西壁に向かってわずかな傾斜が認められる。北東隅と壁際を除いて硬化面が認められる。掘り方は、中央を高く残して壁部を環状に浅く掘り込み、全体にロームブロックを含んだ褐色土で貼り床が施されている。貯蔵穴 北東寄りで確認された。規模は東西74cm、南北70cmの円形で、深さは45cmを測る。覆土は暗褐色・褐色土主体で、上面に焼土と粘土の混在したにぶい

赤褐色土が認められる。ピット 南壁寄り中央に1基が確認されている。配置から出入口施設等に伴う柱穴の可能性ある。覆土は締りの弱い褐色土であるが、壁寄りには浅く締りのある褐色土になっている。カマド 北壁中央部に設けられている。全長は93cmで煙道部は屋外へ35cm掘り込まれ構築されている。燃焼部幅は45cmで、袖部は左袖20cm、右袖48cmが残存する。覆土 締りの強い粘土粒を多量に含んだ灰褐色土と、焼土粒を多量に含んだにぶい赤褐色土が主体で炭化材も確認され、焼失した家屋とみられる。遺物 土師器235点(6,476g)、須恵器81点(7,018g)、灰軸陶器1点(463g)、紡錘車を含めた土製品2点(862g)、石製の腰帯具(巡方)1点(265g)、鉄製鎌1点(60.9g)が出土した。図示された遺物などは建物の東側にまとまる傾向にあるが、石製巡方は西側からの出土である。供膳具は須恵器環が一定量見られるもの土師器環・高台付環が中心になっている。さらに須恵器では大きめの甕が認められるが、それ以外は焼成も良くないものが目立つ。所見 遺物は供膳具が土師器主体へ移行する時期とみられ、須恵器環(第17図12~14)の体部に丸みを持つ形態や底部の調整などから、本遺構は9世紀後葉に埋没したと考えられる。



第16図 S15

土質説明

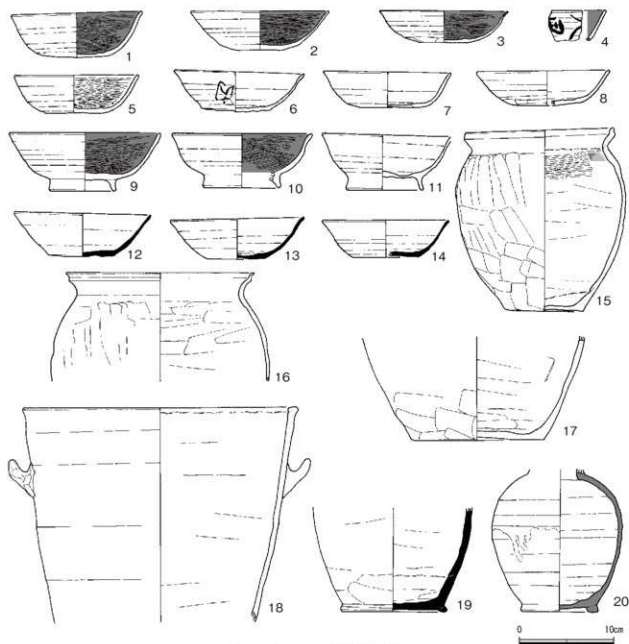
1. 灰褐色土 75YR4/2 ローム粒 ϕ 1~3mm 微量、焼土粒 ϕ 1~10mm 少量、粘土粒 ϕ 1~5mm 多量。締り非常に強い、粘性なし。
2. 暗褐色土 75YR3/4 ローム粒 ϕ 1~3mm 微量、焼土粒 ϕ 1~3mm 微量。締り・粘性弱。
3. にぶい赤褐色土 5YR4/4 焼土粒 ϕ 1~10mm 多量、粘土粒 ϕ 1~10mm 少量。締りあり、粘性弱。
4. 褐色土 75YR4/4 ローム粒 ϕ 1~3mm 多量。締りあり、粘性弱。
5. 褐色土 75YR4/3 ローム粒 ϕ 1~3mm 少量。締り・粘性弱。
6. にぶい赤褐色土 5YR4/4 焼土粒 ϕ 1~3mm 少量、粘土粒 ϕ 1~5mm 少量。締り・粘性弱。

カマド土質説明

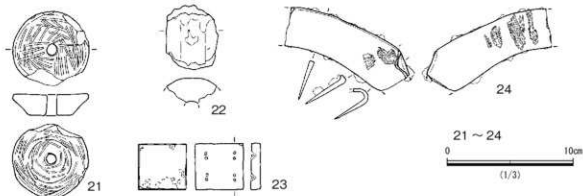
1. 黒褐色土 75YR3/1 焼土ブロック ϕ 5mm 微量、粘土ブロック ϕ 1mm 微量。締りあり、粘性弱。
2. にぶい赤褐色土 5YR4/3 焼土粒・ブロック ϕ 1~5mm 中量。締り・粘性弱。
3. 暗赤褐色土 5YR3/4 焼土粒少量。締り・粘性弱。
4. 暗褐色土 75YR3/4 ローム粒微量。締り・粘性弱。
5. 黒褐色土 75YR3/2 ローム粒微量、焼土粒微量。締り・粘性弱。

7. 暗褐色土 75YR3/4 ローム粒 ϕ 1~5mm 少量、焼土粒 ϕ 1~5mm 微量、粘土粒 ϕ 1~3mm 少量、炭化物粒微量。締り・粘性弱。
8. 褐色土 75YR4/4 ローム粒 ϕ 1~3mm 中量、炭化物粒微量。締り・粘性弱。
9. 褐色土 75YR4/3 ローム粒 ϕ 1~5mm 中量。締り・粘性弱。
10. 褐色土 75YR4/6 ローム粒多量。締りあり、粘性弱。
11. 灰褐色土 75YR4/2 ローム粒・ブロック ϕ 1~20mm 微量、焼土粒 ϕ 1~5mm 微量、粘土粒 ϕ 1~3mm 中量。締りあり、粘性弱。
12. 褐色土 75YR4/3 ローム粒・ブロック ϕ 1~20mm 中量。締りあり、粘性弱。

6. にぶい赤褐色土 5YR4/4 焼土粒・ブロック ϕ 1~3mm 中量。締り・粘性弱。
7. 灰褐色土 75YR5/2 ローム粒・ブロック ϕ 1~20mm 多量、焼土粒 ϕ 1~3mm 少量、粘土粒 ϕ 1~5mm 中量。締り・粘性あり。
8. 褐色土 75YR4/6 ローム粒・ブロック ϕ 1~3mm 中量。締り・粘性弱。



第 17 図 S I 5 出土遺物 (1)

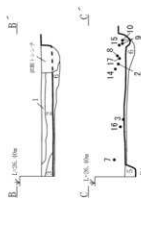
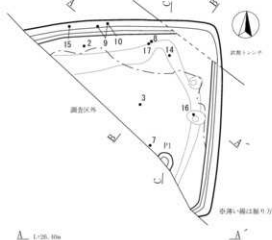


第18図 S15出土遺物(2)

第6表 S15出土遺物観察表

種類番号	種類名称	口径・高さ・底径	残存率	胎土	構成	色調	器形・技法上の特徴
1	土師器 鉢	13.9・4.8・6.4	田沼丸形	雲白粉、針状物微、白 粘粒、透明粒	普通	暗褐色 7.53K3/3	口縁部わずかに欠損。口縁成形、体部外面筋付着。底部丸 底気味で手持ちヘラケズリ。内面黒色処理で横方向ミガキ。
2	土師器 鉢	(14.7)・4.2・5.9	60%	雲母多、長石、石英、 チャート微	普通	にじみ褐色 7.53K6/4	ロクロ成形。体部下端～底部にかけて、ヘラケズリとみられる が摩耗跡等で調整不鮮明。内面黒色処理で底部一方方向のミガキ 後。体部横方向のミガキ。
3	土師器 鉢	(13.6)・3.4・5.9	90%	雲母多、長石、石英、 チャート微	普通	暗 D186/6	ロクロ成形。体部下端手持ちヘラケズリ。底部一方方向ヘラケズ リ。内面黒色処理で、底部一方方向のミガキ後体部横方向のミガ キ。
4	土師器 鉢	—・(3.0)・—	口縁部残	針状物、長石、チャート、 透明粒	普通	にじみ褐色 7.53K6/4	ロクロ成形。体部外面に横位の溝溝「大ヨリ」。内面黒色処理 で、横方向のミガキ。
5	土師器 鉢	13.2・4.1・6.0	80%	雲母少、白色粘	普通	にじみ褐色 7.53K5/4	ロクロ成形。体部外面に筋付着。底部一方方向ヘラケズリで 切り離し痕がわずかに残る。内面底部一方方向のミガキ後体部横 方向のミガキ。
6	土師器 鉢	13.6・4.3・7.2	90%	雲母、針状物、白粘 粒、赤褐色粒	普通	暗 7.53K6/6	ロクロ成形。体部筋付着。底位の溝溝「内」。底部回転ヘラ 切り離し後無調整。
7	土師器 鉢	13.6・4.3・7.8	完形	雲母、長石・石英多、 チャート	普通	灰褐色 7.53K5/2	ロクロ成形。底部回転ヘラ切り離し後未調整。
8	土師器 鉢	14.0・3.7・7.4	90%	長石、チャート、角閃 石、赤褐色粒	普通	にじみ褐色 7.53K7/4	ロクロ成形。口縁部未入。体部下端手持ちヘラケズリ。底部丸 底気味で一方方向のミガキ。
9	土師器 高台付鉢	(16.0)・6.2・6.6	90%	雲母多、長石、石英	普通	にじみ褐色 7.53K5/3	ロクロ成形。高台部張り付け後ナデ。内面黒色処理で、体部下 端～底部一方方向のミガキ後。体部横方向のミガキ。
10	土師器 高台付鉢	(14.9)・5.7・(7.8)	90%	雲母、長石・石英少、 白色粘、赤褐色粒	普通	にじみ褐色 7.53K5/4	ロクロ成形。高台部縁ナデ。内面黒色処理で、内面体部横方 向のミガキ。
11	土師器 高台付鉢	13.8・5.9・7.9	80%	長石・石英少、透明 粒、赤褐色粒	普通	明赤褐色 5185/6	ロクロ成形。高台部縁ナデ。体部内外面約半分は筋付着。
12	須恵器 鉢	14.5・4.6・7.0	90%	雲母、長石・石英多	灰青	灰青褐色 5187/2	ロクロ成形。底部回転ヘラ切り離し後無調整。
13	須恵器 鉢	14.2・4.3・6.2	田沼丸形	雲母少、長石・石英多	普通	灰青 10385/2	ロクロ成形。底部回転ヘラ切り離し後無調整。
14	須恵器 鉢	(13.8)・3.9・(6.8)	60%	雲母少、長石・石英 少、チャート少	普通	黄灰 2.515/1	ロクロ成形。底部不定方向ヘラケズリ。
15	土師器 甕	15.8・19.2・8.2	田沼丸形	雲母少、長石、石英	普通	暗赤褐色 5183/2	口唇部フマミ上げ。口縁部ロコナデ。胴部上半～半位縦方向ヘ ラケズリ後ナデ。下部横方向ヘラケズリ。内面胴部に輪積痕が 残る。胴上部は木口状工具によるロコナデ。以下横方向ヘラケ ズリ。
16	土師器 甕	(19.9)・(11.5)・—	口縁部～胴 部上半	雲母少、長石、石英、 赤褐色粒	普通	黒褐色 7.53K3/2	口唇部外側へフマミ出し。口縁部ロコナデ。胴部胴筋による縦 方向ナデ。内面横方向ヘラケズリ。
17	土師器 甕	—・11.0・13.9	胴部下半～ 底部	雲母、長石・石英多、 チャート微、赤褐色粒	普通	にじみ褐色 7.53K6/4	胴～胴筋横方向ヘラケズリ。底部不定方向ヘラケズリ。内面横方 向ヘラケズリ。
18	土師器 甕	29.2・(22.7)・—	90%	雲母、長石、石英	普通	にじみ黄褐色 10385/3	内外面ともロコナデ。口唇部面取り。口縁部に輪積痕が残 る。把手部は張り付け後、指頭により舌状に成形。
19	須恵器 段取瓶	—・(11.0)・10.8	80%	雲母、長石、石英	普通	にじみ褐色 7.53K6/4	外面は筋面荒調整不鮮明。高台部張り付け。内面ロコナデで 下部に輪積痕と粘土結の痕跡が残る。
20	灰青陶器 此細瓶	—・(15.1)・7.9	70%	長石、石英、黒色粘	良好	灰青褐色 10386/2	胴部欠損。ロクロ成形。高台部張り付け後ナデ。
21	土製品 鉢形土師 器	径：6.0・高：0.8 厚：1.7	田沼丸形	雲母、長石、赤褐色粘	普通	1.5N/ 黒	重量：57.29g 磁器土が主に欠損。全体にミガキ。黒色処理。
22	土製品 皿	長：5.1・幅：4.1 厚：2.0	碗片	長石、石英、チャート	普通	にじみ黄褐色 10385/4	重量：28.94g 表面磨く燃焼。
23	土製品 罐蓋片 (逆方)	長：3.6・幅：3.8 厚：0.7	完形	—	—	灰白 1038/1	重量：26.90g 石材：成沢炭。 表面に漆が部分的に付着。黒漆を塗った「烏油磨き」とみられ る。裏面に滑り孔4ヶ所。
24	鉄製品 器	長：9.8・幅：3.2 厚：0.4	約50%	—	—	—	重量：60.87g 端部折り曲げ。表面部に木貫あり。

位置 B・C4 グリッドに位置する。西側約半分が調査区外になる。規模 南北軸 4.20 m、東西軸 4.10 m 以上の方形を呈する。主軸方向 東壁を軸線とした場合、N-0°を示す。壁 残存高は 25～30cm でやや外傾して立ち上がり、壁溝がほぼ全周する。床 平坦ではあるが西壁に向かってわずかな傾斜が認められる。北東隅から北壁際を除いて硬化面が認められる。掘り方は、中央を高く残して壁側を環状に浅く掘り込み、全体に大き目のローム粒を多量に含んだ褐色土で貼り床が施されている。ピット 南東隅寄りに1基が確認されているが、規模や他に関連するピットが認められないことから、主柱穴とは言及できない。覆土は締りの弱い褐色土である。カマド 調査区内では確認されなかった。覆土 暗褐色土を主体とし、含有物がほとんど認められないことから自然堆積とみられる。遺物 土師器165点(3,754g)、須恵器146点(4,140g)、灰釉陶器1点(330g)、瓦1点(46g)、鉄滓3点(70g)が出土した。供膳具は須恵器環が一定量見られるものの土師器環・高台付環が中心である。本遺構からは土師器・須恵器の墨書土器が目立ち、そのほとんどが「大・田」と書かれている。また須恵器では耳皿1点(第20図17)が出土した。所見 遺物は供膳具が土師器主体へ移行する時期とみられ、須恵器は環以外の器種があまり見られない中、須恵器高台付皿(第20図15・16)が認められることから、本遺構は9世紀中葉～後葉にかけて埋没したと考えられる。



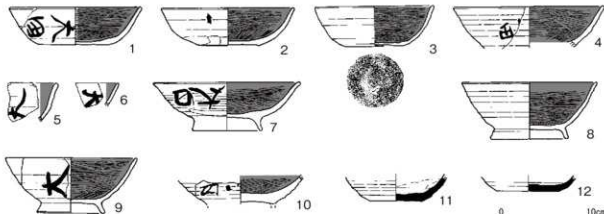
ピット一覧

No.	I
長軸	40
短軸	(22)
深さ	23

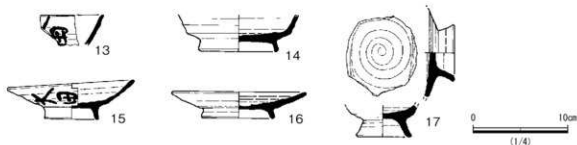
〈 〉は残存値 単位=cm

土師器

1. 暗褐色土 75YR3/4 ローム粒φ1～3mm 微量、炭土粒φ1～5mm 微量。締りあり、粘性弱。
2. 暗褐色土 77YR3/4 ローム粒φ1～5mm 微量、炭土粒φ1～3mm 微量。粘土粒微量。締り・粘性弱。
3. 褐色土 75YR4/3 ローム粒φ1～10mm 少量、炭土粒φ1mm 極微量。締り・粘性弱。
4. 褐色土 75YR4/4 ローム粒φ1～3mm 中量。締り・粘性弱。
5. 褐色土 75YR4/4 ローム粒φ1～10mm 中量。締り・粘性弱。
6. 褐色土 75YR4/6 ローム粒φ1～10mm 多量。締りあり、粘性弱。



第19図 S16、出土遺物(1)



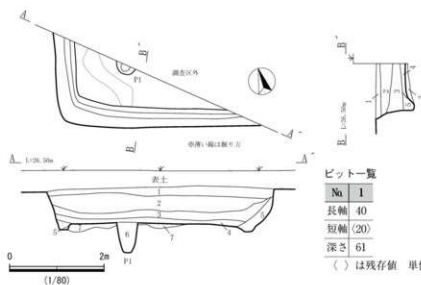
第20図 S16出土遺物(2)

第7表 S16出土遺物観察表

標識番号	種類・器種	口径・器高・底径	残存率	胎土	焼成	色調	器形・技法上の特徴
1	土師器 杯	14.0・3.9・7.5	90%	長石、石英、チャート、赤褐色粒	普通	紺 S167/6	ロクロ成形。体部に縦位の墨書「大出」。体部下端～底部回転ヘラケズリ。内面黒色処理で、底部一方向きが背後体部横方向向きが主。
2	土師器 杯	14.1・4.0・6.4	70%	雲母、長石・石英少、チャート微、赤砂多	普通	にぶい紺 7.S166/3	ロクロ成形。体部に縦位の墨書あり。体部下端～底部平持ちヘラケズリとみられるが詳細は観察不明。内面黒色処理で底部一方向きが背後体部横方向向きが主。
3	土師器 杯	12.6・4.2・6.0	60%	非状物、透明粒	良好	浅黄緑 7.S166/4	ロクロ成形。底部回転不明は切り後、両縁～体部下端にかけて同側ヘラケズリ。内面黒色処理で底部一方向きが背後体部横方向向きが主。
4	土師器 杯	(16.0)・(4.6)・—	20%	非状物微、透明粒、チャート微	普通	紺 S166/6	ロクロ成形。体部に縦位の墨書「口部」。内面黒色処理で、体部横方向のミガキ後下端で不定方向のまばらなミガキ。
5	土師器 杯	—・(4.1)・—	—	口縁部～体部片、非状物、透明粒、チャート少	普通	紺 7.S166/6	ロクロ成形。体部に縦位の墨書「大」。内面黒色処理で、横方向向きが主。
6	土師器 杯	—・(2.5)・—	—	口縁部片、非状物、長石、角閃石	普通	紺 S167/6	ロクロ成形。体部に縦位の墨書「大」。内面黒色処理で、横方向向きが主。
7	土師器 高台付杯	15.6・5.1・7.4	80%	雲母、長石、石英、チャート	普通	にぶい紺 7.S166/3	ロクロ成形。体部に逆位の墨書「大出」。体部下端～底部回転ヘラケズリ。高台部周辺ナズ。内面黒色処理で底部不定方向向きが背後体部横方向向きが主。
8	土師器 高台付杯	(14.3)・6.0・8.2	60%	雲母、長石、石英、赤褐色粒	普通	にぶい紺 7.S166/3	ロクロ成形。底部回転ヘラケズリ。高台部周辺ナズ。内面黒色処理で底部一方向きが背後体部横方向向きが主。
9	土師器 高台付杯	(13.9)・5.8・7.2	30%	雲母、長石、石英、チャート微	普通	にぶい黄緑 10106/3	ロクロ成形。体部に縦位の墨書「大」。内面黒色処理で底部一方向きが背後体部横方向向きが主。
10	土師器 高台付杯	—・(3.1)・—	30%	雲母、長石、石英、チャート	普通	にぶい紺 7.S165/4	ロクロ成形。体部に縦位の墨書あり。体部下端～底部回転ヘラケズリ。高台部周辺。内面黒色処理で底部一方向きが背後体部横方向向きが主。
11	須恵器 杯	—・(2.9)・5.5	30%	雲母、大粒長石、石英、チャート少	普通	灰黄緑 10105/2	ロクロ成形。体部下端～底部回転ヘラケズリ。内面に捺押付書。
12	須恵器 杯	—・(1.7)・6.5	20%	雲母、長石、石英	普通	灰黄 2.S16/2	ロクロ成形。底部一方ヘラケズリ。
13	須恵器 杯	—・(3.2)・—	—	口縁部、雲母、長石、石英少	普通	灰黄 2.S16/2	ロクロ成形。体部に縦位の墨書「口部」。
14	須恵器 高台付杯	—・(4.8)・8.5	40%	雲母少、非状物微、長石、石英、チャート	良好	灰 1015/1	ロクロ成形。体部下端～底部回転ヘラケズリ。高台部周辺ナズ。
15	須恵器 高台付皿	13.5・4.3・5.8	80%	雲母、長石、石英	良好	灰黄 2.S16/2	ロクロ成形。口縁部の歪み大。体部に縦位の墨書「大出」。高台部取り付け後周辺ナズ。底面は高台部内側全体に墨に覆われる。
16	須恵器 高台付皿	14.2・2.8・7.8	40%	雲母、長石、石英、チャート	良好	灰黄 2.S17/2	ロクロ成形。高台部取り付け後周辺ナズ。
17	須恵器 耳皿	(6.8)・(2.8)・5.5	90%	非状物微、長石・石英少、チャート、赤褐色粒	良好	灰白 1017/1	口縁部欠損。ロクロ成形。高台部取り付け後周辺ナズ。

S17 (第21図、第8表、PL 6・12)

位置 B4-5グリッドに位置する。北東側の大部分が調査区外になる。規模 南北軸1.80m以上、東西軸4.00m以上で方形を呈すると考えられる。主軸方向 西壁を軸線とした場合、N-10°-Eを示す。壁 残存高は72～80cmでほぼ垂直に立ち上がり、壁溝は調査範囲内では全周している。床 若干の凹凸が認められ、調査範囲内で硬化面は確認されない。掘り方は、壁側を環状に浅く掘り込み、大き目のローム粒を多量に含んだ褐色土で貼り床が施されている。ピット 掘り方において調査区外にかかり1基が確認されている。覆土は締りの弱い褐色土である。カマド 調査区内では確認できなかった。覆土 暗褐色土を主体とした自然堆積とみられる。壁際から床直上にかけてはローム粒を多めに含む褐色土が堆積している。遺物 土師器119点(1,522g)、須恵器63点(1,044g)が出土した。調査区外の部分が多く出土量は限定的だが、供膳具は須恵器杯が一定量見られるものの土師器杯・高台付杯が中心である。所見 土師器高台付皿(第21図1)や土師器中心の出土傾向から、本遺構は9世紀後葉にかけて埋没したと考えられる。



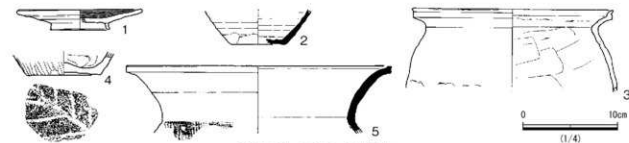
ピット一覧

No.	1
長軸	40
短軸	(20)
深さ	61

() は残存値 単位=cm

土層説明

1. 褐色土 7.5YR4/3 ローム粒φ1~3mm 少量、焼土粒φ1~10mm 微量。締り・粘性弱。
2. 暗褐色土 7.5YR3/4 ローム粒φ1~5mm 少量、焼土粒φ1~3mm 微量。締り・粘性弱。
3. 暗褐色土 7.5YR3/4 ローム粒φ1~3mm 少量、焼土粒φ1~5mm 少量。締り弱、粘性ややあり。
4. 褐色土 7.5YR4/3 ローム粒φ1~5mm 中量、焼土粒φ1~3mm 微量。締りあり。
5. 褐色土 7.5YR4/6 ローム粒φ1~3mm 中量。締り・粘性弱。
6. 褐色土 7.5YR4/6 ローム粒φ1~5mm 多量。締り・粘性弱。
7. 褐色土 10YR4/6 ローム粒φ1~10mm 多量。締り非常にあり、粘性弱。



第21図 S17、出土遺物

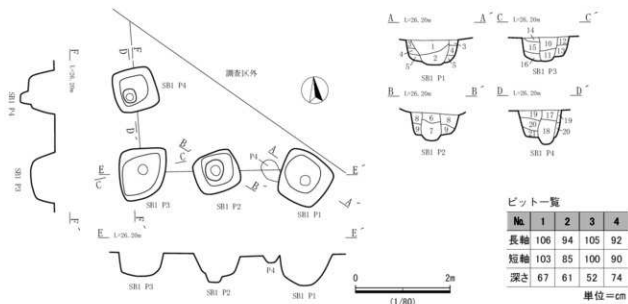
第8表 S17出土遺物観察表

検出番号	種類 器種	口径・器高・底径	残存率	胎土	焼成	色調	器形・技法上の特徴
1	土師器 高台付皿	(13.3) × 2.2 × (6.2)	30%	雲母少、白色胎、透明 粒	普通	に深い橙 7.5YR6/4	口テラ成形、体部下端~底部回転ヘラケズリ。高台部貼り付け 残ナゲ。内面黒色処理で底部一方向ノゲを後体部縦方向ノゲ ナゲ。
2	須恵器 钵	— (3.7) × (5.6)	20%	雲母、長石、石英、 チャート	普通	灰黄褐 10YR5/2	口テラ成形、体部下端手持ち回転ヘラケズリ。底部一方向ヘラ ケズリ。
3	土師器 壺	(21.2) × (9.7) × —	—	雲母、長石・石英多、 チャート	普通	外：赤褐 5YR4/6 内：に深い橙 7.5YR6/4	口唇部ツマミ上げ、口縁部ココナゲで内面に輪轆痕が残る。胴 部上半ナゲ。中位で以下ヘラ伏工具痕が残る、縦方向ヘラケズ リか、内面横方向ヘラナゲ。
4	土師器 壺	— (2.5) × 7.8	—	底面片	普通	に深い赤褐 5YR5/4	胴部下端縦方向ノゲナゲ。底部本巻後、内面ヘラ伏工具による圓 盤。
5	須恵器 壺	(28.9) × (7.1) × —	—	雲母、長石、石英、白 色胎	普通	外：靑灰 10YR5/1 内：灰黄褐 10YR5/2	口唇部ツマミ上げ、口縁部ココナゲ。胴部縦方向平行タタキ、

第4節 掘立柱建物跡

SB1 (第22図、PL 6)

位置 B4グリッドに位置し、北東側が調査区外になる。構造・規模 掘立柱建物跡とみられる。南北2間(3.20m)以上、東西2間(3.50m)以上で、調査区内での桁行・梁行は把握できない。柱間寸法はP1・2間1.90m、P2・3間1.60m、P3・4間1.60mを測る。主軸方向 P1~3列を桁行と見た場合の方向はN-82°-Wを示す。柱穴 柱穴は4基が確認され、柱掘り方はいずれも方形を基調としている。覆土 暗褐色・褐色土を主体とし、P4では焼土粒・焼土ブロックが全体に含まれていた。いずれにも柱痕跡が確認され、径は概ね30~40cmに収まるが、P1は径が大きく抜き取り痕の可能性が有る。遺物 土師器12点(76g)、須恵器17点(221g)が出土した。細片のみの出土で、土師器・須恵器ともに甕の破片が中心である。所見 遺物から時期を推定するのは困難であるが、柱掘り方や主軸方向がSB2に類似しており、本遺構はSB2と同時期の9世紀後葉に埋没した可能性が考えられる。



ピット一覧

No.	1	2	3	4
長軸	106	94	105	92
短軸	103	85	100	90
深さ	67	61	52	74

単位=cm

土層説明

- | | |
|---|--|
| <p>1. 黒褐色土 75YR3/2 ローム粒φ1~5mm 微量。礎土粒φ1mm 極微量。締り・粘性弱。</p> <p>2. 暗褐色土 75YR3/3 ローム粒φ1~3mm 少量。締り・粘性弱。</p> <p>3. 暗褐色土 75YR3/3 ローム粒φ1~3mm 少量。締り・粘性弱。</p> <p>4. 暗褐色土 75YR3/4 ローム粒φ1~3mm 微量。礎土粒φ1~3mm 微量。締り・粘性弱。</p> <p>5. 暗褐色土 75YR3/4 ローム粒φ1~10mm 少量。締り・粘性弱。</p> <p>6. 暗褐色土 75YR3/4 ローム粒φ1~10mm 少量。締り・粘性弱。</p> <p>7. 褐色土 75YR4/3 ローム粒・ブロックφ1~20mm 中量。締り・粘性弱。</p> <p>8. 褐色土 75YR4/4 ローム粒φ1~5mm 多量。締り・粘性弱。</p> <p>9. 褐色土 75YR4/6 ローム粒φ1~5mm 多量。締りあり。粘性弱。</p> <p>10. 褐色土 75YR4/3 ローム粒φ1~5mm 中量。締り・粘性弱。</p> <p>11. 暗褐色土 75YR3/4 ローム粒φ1~3mm 少量。締り・粘性弱。</p> <p>12. 褐色土 75YR4/4 ローム粒・ブロックφ1~20mm 多量。締り・粘性弱。</p> <p>13. 褐色土 75YR4/4 ローム粒φ1~3mm 多量。締り・粘性弱。</p> | <p>14. 暗褐色土 75YR3/4 ローム粒φ1~3mm 微量。礎土φ1~3mm 極微量。締り・粘性弱。</p> <p>15. 褐色土 75YR4/3 ローム粒φ1~3mm 少量。締り・粘性弱。</p> <p>16. 暗褐色土 75YR3/4 ローム粒φ1~3mm 微量。締り・粘性弱。</p> <p>17. 暗褐色土 75YR3/3 ローム粒φ1~3mm 微量。礎土粒φ1~5mm 微量。締り・粘性弱。</p> <p>18. 暗褐色土 75YR3/4 ローム粒φ1~10mm 少量。礎土粒φ1~3mm 微量。炭化物粒極微量。締り・粘性弱。</p> <p>19. 暗褐色土 75YR3/3 ローム粒φ1~5mm 微量。礎土粒φ1~3mm 微量。締り・粘性弱。</p> <p>20. 暗赤褐色土 5YR3/4 ローム・ブロックφ1~20mm 少量。礎土粒φ1~3mm 少量。締り・粘性弱。</p> <p>21. 暗褐色土 75YR3/4 ローム粒φ1~10mm 少量。礎土φ1~3mm 微量。締り・粘性弱。</p> |
|---|--|

第22図 SB1

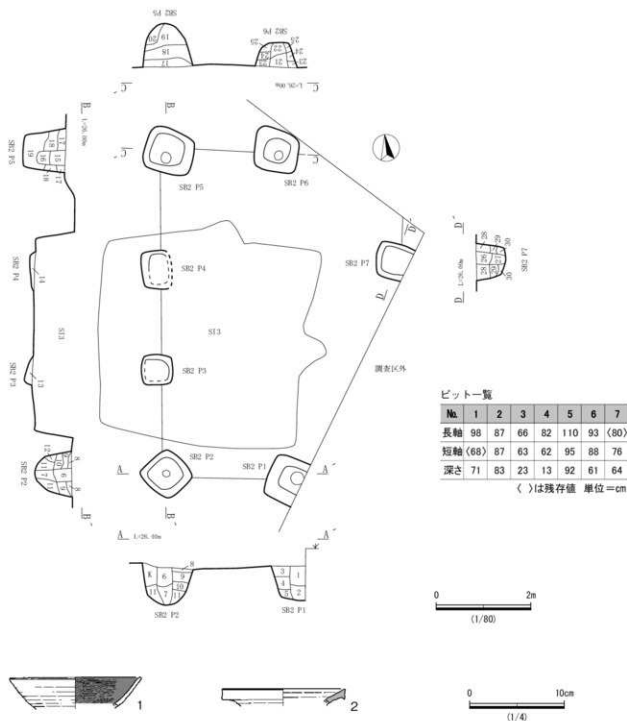
SB2 (第23図、第9表、PL 6・7・12)

位置 C6・D5・6グリッドに位置し、東側が調査区外になる。SI3と重複し、本道構が新しい。構造・規模 御柱建物跡で、桁行3間(660m)梁行2間(480~500m)の南北棟となる。柱間寸法はP1・2間2.80m、P2・3・4間各2.10m、P4・5・6間各2.40mで一定ではない。主軸方向 N-6°-Eを示す。柱穴 柱穴は7基が確認され、柱掘り方はいずれも方形を基調としている。覆土 暗褐色・褐色土を主体としている。P3~5を除き柱痕跡が確認され、径は概ね30~40cmに収まる。遺物 土師器27点(212g)、須恵器18点(145g)、灰陶陶器1点(6g)が出土した。7基の柱穴の内5基(P1・2・5~7)から細片

土層説明

- | | |
|--|---|
| <p>1. 暗褐色土 75YR3/4 ローム粒少量。締り・粘性弱。</p> <p>2. 褐色土 75YR4/3 ローム粒φ1~3mm 少量。締り・粘性弱。</p> <p>3. 褐色土 75YR4/3 ローム粒φ1~3mm 少量。締り・粘性弱。</p> <p>4. 褐色土 75YR4/4 ローム粒φ1~3mm 中量。締り・粘性弱。</p> <p>5. 褐色土 75YR4/6 ローム粒φ1~3mm 多量。締り・粘性弱。</p> <p>6. 暗褐色土 75YR3/2 ローム粒φ1~3mm 微量。炭化物微量。締り・粘性弱。</p> <p>7. 暗褐色土 75YR3/4 ローム粒φ1~3mm 微量。締り・粘性弱。</p> <p>8. 褐色土 75YR4/3 ローム粒φ1~3mm 少量。締り・粘性弱。</p> <p>9. 暗褐色土 75YR3/4 ローム粒φ1~10mm 少量。締り・粘性弱。</p> <p>10. 褐色土 75YR4/6 ローム粒・ブロックφ1~20mm 多量。締り・粘性弱。</p> <p>11. 暗褐色土 75YR3/3 ローム粒φ1~3mm 微量。締り・粘性弱。</p> <p>12. 褐色土 75YR4/6 ローム粒φ1~3mm 多量。締り・粘性弱。</p> <p>13. 暗褐色土 75YR2/2 ローム粒φ1mm 極微量。締り・粘性弱。</p> <p>14. 黒褐色土 75YR2/2 ローム粒φ1~3mm 極微量。黒色土極微量。締り・粘性弱。</p> <p>15. 暗褐色土 75YR3/4 ローム粒φ1~3mm 微量。締り・粘性弱。</p> | <p>16. 暗褐色土 75YR3/3 ローム粒φ1~3mm 微量。締り・粘性弱。</p> <p>17. 褐色土 75YR4/3 ローム粒φ1~3mm 少量。締り・粘性弱。</p> <p>18. 褐色土 75YR4/3 ローム粒φ1~5mm 少量。締り・粘性弱。</p> <p>19. 明褐色土 75YR5/6 ローム粒φ1~3mm 多量。締り・粘性弱。</p> <p>20. 黒褐色土 75YR2/2 ローム粒極微量。締り・粘性弱。</p> <p>21. 暗褐色土 75YR3/4 ロームφ1~3mm 少量。締り・粘性弱。</p> <p>22. 暗褐色土 75YR3/4 ローム粒φ1~5mm 少量。締り・粘性弱。</p> <p>23. 暗褐色土 75YR3/4 ローム粒φ1~5mm 微量。締り・粘性弱。</p> <p>24. 褐色土 75YR4/3 ローム粒φ1~3mm 中量。締り・粘性弱。</p> <p>25. 褐色土 75YR4/4 ローム粒多量。締り・粘性弱。</p> <p>26. 暗褐色土 75YR3/4 ローム粒φ1~3mm 少量。締り・粘性弱。</p> <p>27. 褐色土 75YR4/3 ローム粒φ1~3mm 中量。締り・粘性弱。</p> <p>28. 暗褐色土 75YR3/4 ローム粒φ1~3mm 少量。締り・粘性弱。</p> <p>29. 褐色土 75YR4/6 ローム粒φ1~3mm 多量。締り・粘性弱。</p> <p>30. 褐色土 75YR4/3 ローム粒中量。締り・粘性弱。</p> |
|--|---|

のみの出土で、土師器・須恵器ともに甕の破片が中心である。土師器の供膳具は内面黒色処理とミガキ調整の破片が多い中で、細片の中には未処理のものも認められる。所見 土師器坏もしくは高台付坏の口縁部片（第23図1）の形態やSI3の重複関係から、本遺構は9世紀後葉に埋没したと考えられる。



ピット一覧

No.	1	2	3	4	5	6	7
長軸	98	87	66	82	110	93	(80)
短軸 (68)	87	63	62	95	88	76	
深さ	71	83	23	13	92	61	64

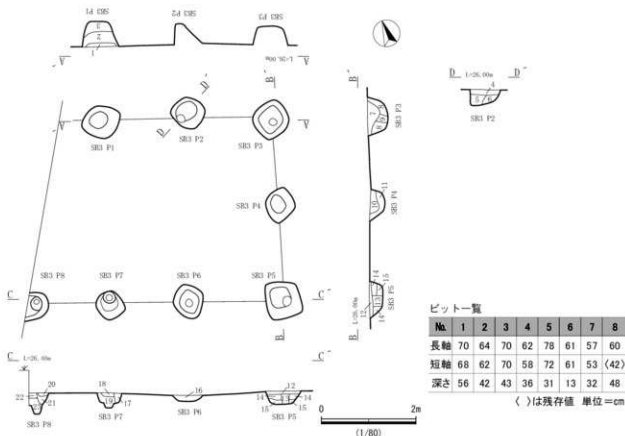
()は残存値 単位=cm

第9表 SB2出土遺物観察表

編目番号	種類・器種	口径・器高・底径	残存率	胎土	構成	色調	器形・技法上の特徴
1	土師器 IF	(14.9)・(3.3)・—	20%	黒母、灰石・石英少、 赤褐色配少	普通	にぶい 7.5YR7/4	P1出土。ロタロ成形。内面黒色処理で体部横方向のミガキ。
2	灰釉陶器 長須輪	(13.9)・(1.7)・—	口縁部	黒色配	良好	浅黄 8Y7.5	P2出土。ロタロ成形。口唇部を下方へ引き出し。

SB3 (第24図, PL 7)

位置 E4・5、P5グリッドに位置し、西側は調査区外になる。構造・規模 側柱建物跡で、桁行3間(5.20m)以上、梁行2間(3.80m)の東西棟となる。柱間寸法はP1・2間1.70m、P2・3間1.90m、P3・4間1.80m、P4・5・6間各2.00m、P6・7間1.70m、P7・8間1.50mを測り、一定ではないが南北の桁行ではP1・2・3間と対となるP5・6・7間がほぼ揃っている。主軸方向 N-72°-Wを示す。柱穴 柱穴は8基が確認され、柱掘り方はいずれも方形を基調としている。覆土 暗褐色・褐色土を主体としている。P5のみで柱痕跡が確認され、径は20cm程である。遺物 土師器13点(123g)、須恵器6点(31g)が出土した。8基の柱穴の内5基(P1~3・5・7)から細片のみの出土で、土師器の破片が中心である。須恵器はほとんどが坏の破片であるが細片のみである。所見 遺物の出土傾向はSB1・2と差異はないが、遺構の形態では柱穴が小規模になっており若干の時期差がうかがえる。したがって本遺構の時期は9世紀後葉以降と考えたい。



土層説明

1. 暗褐色土 75YR3/4 ローム粒φ1~3mm微量。締り・粘性弱。
2. 暗褐色土 75YR3/4 ローム粒φ1~2mm微量。締り・粘性弱。
3. 暗褐色土 75YR4/3 ローム粒・ブロックφ1~15mm少量。締り・粘性弱。
4. 褐色土 75YR4/3 ローム粒少量。締り・粘性弱。
5. 暗褐色土 75YR3/4 ローム粒φ1~3mm微量。締り・粘性弱。
6. 褐色土 75YR4/6 ローム粒多量。締り・粘性弱。
7. 暗褐色土 75YR3/4 ローム粒φ1~10mm少量。締り・粘性弱。
8. 褐色土 75YR4/3 ローム粒φ1~10mm中量。締り・粘性弱。
9. 黒褐色土 75YR3/2 ローム粒φ1~5mm微量。焼土粒微量。締り・粘性弱。
10. 暗褐色土 75YR3/4 ローム粒φ1~3mm少量。焼土粒φ1mm微量。締り・粘性弱。
11. 褐色土 75YR4/4 ローム粒多量。締り・粘性弱。

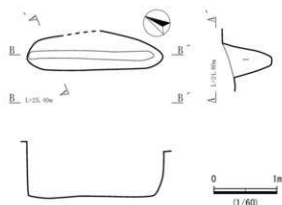
12. 褐色土 75YR4/3 ローム粒φ1~3mm少量。締り・粘性弱。
13. 褐色土 75YR4/3 ローム粒φ1~3mm中量。締り・粘性弱。
14. 暗褐色土 75YR3/4 ローム粒φ1~3mm少量。締り・粘性弱。
15. 褐色土 75YR4/4 ローム粒φ1~10mm中量。締り・粘性弱。
16. 褐色土 75YR4/4 ローム粒中量。締りなし。粘性弱。
17. 褐色土 75YR4/3 ローム粒φ1~3mm少量。締り・粘性弱。
18. 褐色土 75YR4/3 ローム粒φ1~3mm少量。締り・粘性弱。
19. 褐色土 75YR4/4 ローム粒φ1~3mm中量。締り・粘性弱。
20. 黒褐色土 75YR3/2 ローム粒無微量。焼土粒φ1mm無微量。締り・粘性弱。
21. 褐色土 75YR4/3 ローム粒φ1~3mm中量。黒色土層に含む。締り・粘性弱。
22. 褐色土 75YR4/3 ローム粒φ1~3mm中量。締り・粘性弱。
23. 暗褐色土 75YR3/3 ローム粒少量。締り・粘性弱。

第24図 SB3

第5節 土坑・陥し穴状遺構

SK1 (第25図, PL 7)

位置 G4グリッドに位置する。S11と重複し、本遺構が古い。平面形・規模 溝状。長軸2.15m、短軸0.62m、深さ0.87mを測る。長軸方向 N-28°-Wを示す。壁面・底面 垂直に立ち上がる。底面は幅0.12mで溝状に掘り込まれる。覆土 S11によって削平され下層のみ確認となる。褐色土が主体である。遺物 出土しなかった。所見 所謂T字型の陥し穴とみられ、縄文時代に利用されたと考えられるが、遺物が出土せず時期の特定は困難である。

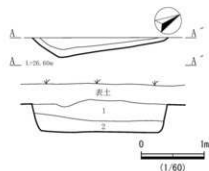


土解説明
1. 暗褐色土 75YR4/4 ローム粒φ1~3mm中量。織り・粘性弱。

第25図 SK1

SK2 (第26図, 第10表, PL 7・12)

位置 A3グリッドに位置する。西側の大部分が調査区外になる。平面形・規模 形状は把握できない。調査区内での規模は南北2.15m以上、東西0.30m以上、深さ0.43mを測る。長軸方向把握できない。壁面・底面 外傾して立ち上がる。底面はほぼ平坦なようである。覆土 暗褐色土が主体で、含有物が少ないことから自然堆積とみられる。遺物 土師器4点(32g)、須恵器2点(46g)が出土した。土師器壺が多く認められる。所見 図示した遺物は覆土中から出土した須恵器杯(第26図1)で、この遺物形態から10世紀代には埋没したと考えられる。



土解説明
1. 暗褐色土 75YR3/3 ローム粒φ1~3mm微量。焼土粒φ1~5mm微量。織り・粘性弱。
2. 暗褐色土 75YR3/4 ローム粒φ1~3mm少量。焼土粒φ1~3mm微量。織り・粘性弱。

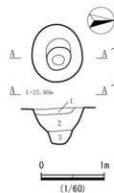
第26図 SK2、出土遺物

第10表 SK2出土遺物観察表

図号	種類 器種	口径・器高・底径	残存率	胎土	構成	色調	器形・技法上の特徴
1	須恵器 杯	(33.6)・4.2・(6.6)	10%	雲母、長石、チャート、白色粒	普通	にふい焼 7.5YR5/4	未還元。ロケロ成形。体部下端~底部へラケズリ。内面に焼砂付着。

SK3 (第27図, PL 7・8)

位置 F4グリッドに位置する。平面形・規模 ほぼ円形。長軸0.92m、短軸0.80m、深さ0.59mを測る。長軸方向 N-90°-Wを示す。壁面・底面 湾曲して立ち上がる。底面はピット状に窪む。覆土 暗褐色土が主体で、中~下層で大き目の焼土粒や炭化物を含むことから人為的な堆積の可能性がある。遺物 土師器5点(51g)、須恵器1点(8g)が出土した。土師器は壺、須恵器は高台付杯の底部片で、いずれも細片である。所見 出土している遺物の細片は各陥し穴建物跡のものと同様ことから、本遺構の時期は9世紀代に埋没した可能性がある。



土解説明
1. 暗褐色土 75YR3/3 ローム粒φ1mm無微量。焼土粒φ1mm無微量。織り・粘性弱。
2. 暗褐色土 75YR3/3 ローム粒φ1~3mm無微量。焼土粒φ1~10mm無微量。炭化物無微量。織り・粘性弱。
3. 暗褐色土 75YR3/4 ローム粒微量。焼土粒φ1mm無微量。織り・粘性弱。

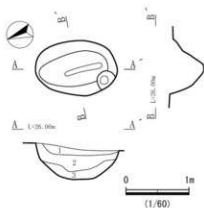
第27図 SK3

SK 4 (第28図, PL 8)

位置 B4グリッドに位置する。平面形・規模 楕円形。長軸1.30m、短軸0.89m、深さ0.60mを測る。南西際に径0.30mの小穴がある。長軸方向 N-20°-Eを示す。壁面・底面 湾曲して立ち上がる。底面は丸底状。覆土 暗褐色土が主体で、含有物がほとんど認められないことから自然堆積とみられる。遺物 出土しなかった。所見 遺物が出土せず、本遺構の時期は不明である。

土層説明

1. 暗褐色土7.5YR3/3 ローム粒微量。締り・粘性弱。
2. 暗褐色土7.5YR3/4 ローム粒微量。締り・粘性弱。
3. 褐色土7.5YR4/3 ローム粒少量。締りあり、粘性ややあり。



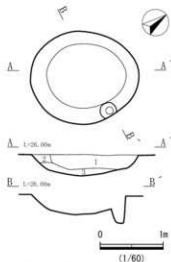
第28図 SK 4

SK 5 (第29図, PL 8)

位置 A・B3グリッドに位置する。平面形・規模 ほぼ円形。長軸1.74m、短軸1.48m、深さ0.33mを測る。東際に径0.27mの小穴がある。長軸方向 N-34°-Eを示す。壁面・底面 緩やかに立ち上がる。底面はやや丸底である。覆土 暗褐色土が主体であるが、底面直上には褐色土が堆積しローム粒が多量に含まれる。遺物 土師器10点(145g)、須恵器4点(15g)、灰軸陶器1点(6g)が出土した。いずれも細片で、土師器・須恵器ともに甕が多く認められる。所見 出土した遺物の中で、須恵器甕の胴部片は平行タタキの破片が主体になるように、本遺構の時期は9世紀代に埋没した可能性がある。

土層説明

1. 暗褐色土7.5YR3/4 ローム粒φ1~5mm 微量、焼土粒φ1~10mm 微量。締り・粘性弱。
2. 褐色土7.5YR4/3 ローム粒φ1~5mm 微量。締り・粘性弱。
3. 褐色土7.5YR4/6 ローム粒少量。締りあり、粘性ややあり。



第29図 SK 5

SK 6 (第30図, 第11表, PL 8・12)

位置 B3グリッドに位置する。平面形・規模 ほぼ円形。長軸1.50m、短軸1.27m、深さ0.28mを測る。長軸方向 N-60°-Wを示す。壁面・底面 ほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦である。覆土 焼土粒が含まれた黒褐色土が主体で、底面直上には暗褐色土が堆積し、人為的な堆積とみられる。遺物 土師器33点(75g)、須恵器22点(193g)、灰軸陶器1点(4g)が出土した。いずれも細片で、土師器・須恵器ともに甕が多く認められる。所見 出土した須恵器坏(第30図1)は、体部が丸みを持って立ち上がる形態で焼成が良くない。須恵器甕の胴部片の中には格子タタキの破片が認められるなどの出土傾向から、本遺構の時期は9世紀後葉に埋没した可能性がある。



土層説明

1. 黒褐色土7.5YR3/2 ローム粒φ1~3mm 微量、焼土粒φ1~3mm 微量。締り・粘性弱。
2. 暗褐色土7.5YR3/3 ローム粒φ1~3mm 微量。締り・粘性弱。

第30図 SK 6、出土遺物

第11表 SK 6出土遺物観察表

種類(番号)	種類(器種)	口径・器高・底径	残存率	胎土	構成	色調	器形・技法上の特徴
1	須恵器 甕	(14.0)・4.2・6.3	70%	灰白、長石、石英多、キヤート	普通	灰黄陶 10YR5/2	本器元部分あり。口口成肌。体部下端~底部下平。

SK7 (第31図, PL 8)

位置 D2グリッドに位置する。平面形・規模 ほぼ方形。長軸0.95 m、短軸0.92 m、深さ0.41 mを測る。長軸方向 N-15°-Eを示す。壁面・底面 ほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦である。覆土 ロームブロックが多く含まれた褐色土が主体で、底面直上には黒褐色土が堆積し、人為的な堆積とみられる。遺物 土師器3点 (17g)、須恵器6点 (101g) が出土した。いずれも細片で須恵器甕が多く認められる。所見 須恵器甕の胴部片の中には格子タタキの破片が認められることから、本遺構の時期は9世紀後葉に埋没した可能性がある。



第31図 SK7

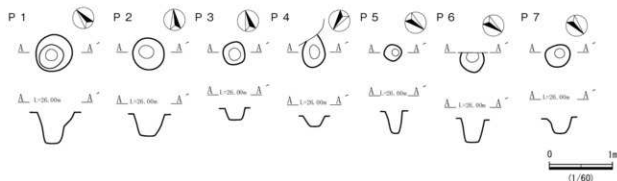
土層説明

1. 褐色土75YR4/3 ローム殻・ブロックφ1~20mm中量。細り・粘性弱。
2. 黒褐色土75YR3/1 ローム殻微量。細りあり、粘性ややあり。

第6節 ビット

P1~7 (第32図, 第12・13表, PL12)

遺構 調査区内では7基のビットが確認された。いずれのビットも覆土は暗褐色土で類似し、北東側を中心に散在している。P3・4、P5~7など近接するビット群はあるものの、規則性はうかがえない。ここでは一覧表(第12表)に詳細をまとめた。遺物 ほとんどのビットから遺物の出土は認められなかったが、P7より土師器高台付皿(第32図1)1点(150g)が出土した。所見 P7から出土した遺物は9世紀後葉の所産とみられる。他のビットは遺物が出土していないものの、覆土の状態がP7と類似することを重視すると、これらのビットは9世紀後葉に埋没したと考えられる。



第12表 ビット一覧表

No.	1	2	3	4	5	6	7
長軸	60	52	36	50	26	38	40
短軸	55	51	34	23	26	<32>	34
深さ	51	36	19	16	36	38	29
位置	C5	B3	B4	B4	C5	C5	C5

<>は残存値 単位=cm



第32図 P1~7、P7出土遺物

第13表 P7出土遺物観察表

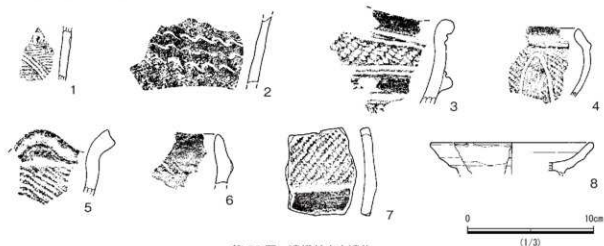
検出番号	種類・図種	口径・器高・底径	残存率	胎土	構成	色調	器形・技法上の特徴
1	土師器 皿	12.6・3.0・6.7	90%	針状物、チャート、透明粒	普通	明褐色 7.5YR5.6	口タロ成皿、底面高台部張り付け後ナダ。内面黒色地埋で不定方向のミガキ。

第7節 遺構外出土遺物

今次地点では9世紀代を中心とした集落が展開し、遺物は土師器・須恵器が主体で出土している。その中で遺構に伴わない表土や攪乱中からの遺物は、縄文土器28点(678g)、土師器207点(2,440g)、須恵器147点(2,437g) 灰釉陶器1点(6g)、陶・磁器4点(58g)が出土した。一方で遺構内出土の遺物で当該時期に伴わない遺物は縄文土器23点(503g)、中世陶器1点(19g)である。縄文土器の内16点(284g)がS I 1に混入している。

縄文土器は前期～後期まで認められる。1・2は前期終末期の破片で、1は幾何状の文様が描かれた西関東系の十三菩提式、2は多段の結節回転文を横走させた東関東系の粟島台式である。3～5は中期に比定される口縁部片で、3は太目の隆帯と2条1単位の沈線で区画された口縁部片で、胎土に雲母を含み、縄文が施文された阿玉台Ⅳ式である。4・5は微隆線で口縁部を区画し無文帯を形成する加曾利EⅣ式である。4は沈線間を磨り消していることから5よりも古相とみられる。いずれも縦方向の縄文が施文される。6は隆帯にキザミが施され、網取式の後期前葉のものと思われる。7は加曾利EⅢ～Ⅳ式の胴部破片を二次利用した土器片鏝である。1・6はS I 1覆土中から出土し、いずれかの遺物の時期に重複する陥し穴状遺構(S K 1)と関連する可能性がある。

陶器では、8は瀬戸・美濃系の丸皿で、16～17世紀に比定される大窯期～登窯期の所産と考えられる(第33図、第14表、PL12)。



第33図 遺構外出土遺物

第14表 遺構外出土遺物観察表

探検番号	種類・器種	口径・器高・底径	残存率	胎土	地味	色調	器形・技法上の特徴
1	縄文土器 深鉢	—・(4.3)・—	胴部片	白色粒、赤褐色粒、長石類	普通	に高い黄緑 10786/4	条状文を横立一列位に施し、三角状刺突を施文、内面ヨコミガキ。
2	縄文土器 深鉢	—・(5.2)・—	胴部片	白色粒、透明粒、石英	普通	黄 7,5384/3	横立の無節L縄文もしくは単節L縄文で3段の結節的回転文を施文。
3	縄文土器 深鉢	—・(6.6)・—	口縁部片	雲母、長石、石英、角閃石類	普通	に高い褐 7,5385/4	微隆口縁、溝状沈線により区画し、隆帯に2条1単位の沈線が沿う。区画内、胴部とともに太目の単節系L縄文を縦方向に施文、内面ヨコミガキ。
4	縄文土器 深鉢	—・(5.3)・—	口縁部片	白色粒、透明粒、赤褐色	普通	に高い橙 7,5386/4	口縁部は微隆線で区画し、無文帯、胴部は沈線で帯字状に区画し、内部を磨り消す。地味は縦方向の単節系L縄文を施文、内面黒色化しヨコミガキ。
5	縄文土器 深鉢	—・(5.2)・—	口縁部片	長石、石英、角閃石	普通	に高い黄緑 10787/3	微隆口縁、口縁に沿って凹線状隆帯が沿う。微隆部を外側へ突出させる。地味は縦方向の単節系L縄文、内面ヨコミガキ。
6	縄文土器 深鉢	—・(3.9)・—	口縁部片	白色粒、角閃石、輝石類、赤褐色粒	普通	に高い橙 7,5386/4	口縁部はキザミが施された隆帯によって区画され、無文帯、内面ヨコミガキ。
7	土製品 土器片鏝	長:6.9・幅:5.6 厚:1.0	完形	白色粒、透明粒、角閃石類	普通	に高い褐 7,5385/3	重量:46.52g。長軸方向両端に狭り、加曾利EⅢ～Ⅳ式の深鉢胴部片を二次利用する。文様が凹線縁を垂下させ区画内を磨り消し、地味は縦方向の単節系L縄文を施文。
8	陶器 皿	(13.0)・(2.5)・—	10%	石英類、黒色粒微	良好	灰白 571/2	底面を除き内外面ともに灰釉を施す。口縁が拭き取られた口栗形。高台部は磨り出し高台で、内面が欠損。

第4章 まとめ

1. 前神田遺跡2次地点における土地利用の変遷

前神田遺跡2次調査地点において、土地利用が開始されたのは縄文時代からになる。陥し穴状遺構（SK1）1基のみの確認ではあったが、狩猟の場として利用されていたようである。陥し穴からは遺物は出土していないものの、重複する竪穴建物跡S11の覆土中に縄文土器の破片（第34図1・6・7）が含まれており、SK1に関連する遺物の可能性がある。これらを含め調査区内からは縄文前期終末から後期初頭に比定される破片や土製品が出土し、周辺に該期遺構の所在を示唆したものと言えよう。

弥生時代から奈良時代にかけては今次地点での利用は認められなかったが、平安時代になって集落としての営みが開始されている。確認された竪穴建物跡7軒、掘立柱建物跡3棟より出土した遺物の様相から、集落の時期は9世紀代にわたって、継続的に変遷していったことが明らかになった。

9世紀代に入って最初に出現するのはS13と考えられる。遺物では供膳具が須恵器を主体とし、土師器はほとんどが煮炊き具のみの出土であった。その中で須恵器環（第13図1）や土師器甕（第13図10）などに古相のものも含まれるなどの様相から、9世紀前葉～中葉にかけての比較的長い期間をかけて埋没したことがうかがえる。S11の遺物はS13と同様の出土傾向ではあるが、須恵器環は新治窯跡群産のものが中心となり、坏・蓋の形態から小高村内窯跡段階～東城寺寄居前B単位群窯跡段階とみられ、S13より後の9世紀中葉～後葉にかけて埋没したようである。S16の遺物は、須恵器が坏以外の器種の減少と、高台付甕に代わって高台付皿が認められ、土師器の供膳具が一定量共存してくる傾向から、S11・3に後続する東城寺寄居前B単位群窯跡段階～小野1号窯跡段階と考えられる。S14は出土量が少ないながらもS16と同様の傾向が見られることからほぼ同時期に営まれていた可能性がある。S12・5・7では供膳具の主体が須恵器から土師器へと移行する傾向にある。須恵器の出土は坏と甕以外ほとんど認められなくなっていることや、坏（第17図12～14）は焼成が良好ではなく、内湾する形態など小野1号窯に継続する段階の様相である。一方、土師器では須恵器の出土量を上回り、内面黒色処理が省略されたものも認められる。高台付坏は内湾して立ち上がる形態になっており、須恵器で示される段階の時期と同様で、9世紀後葉でもS14・6の埋没以降に廃棄されたと考えられる。掘立柱建物跡の時期は遺物の出土量が少なく時期を特定するのは難しいが、SB2とS13との重複関係から9世紀中葉以降に構築・利用されたものであろう。このSB2の柱穴の状態や規模や主軸方向規模等の比較から、類似するSB1ではほぼ同時期の利用が想定されるが、主軸や柱穴の規模等が相違するSB3では時期差がうかがえる。以上の各竪穴建物跡・掘立柱建物跡の変遷から今次地点で確認された集落は9世紀前葉～中葉にかけて出現し、後葉になって盛期を迎えたことが理解された。

2. 前神田遺跡第2次地点における竪穴建物跡の特徴

今次地点の竪穴建物跡は7軒で、その内3軒ではカマドの作り替えや床面の修復、建物の拡張が確認されている。カマドの作り替えはS12・3で認められ、いずれも北壁側で使用されていたカマドを廃棄し、東壁側へ新たに構築している。さらにS12ではカマドを作り替えた際に貼り床を再度貼り替えることが確認された。S14は長軸方向に長い規模の竪穴建物跡であるが、掘り方の調査により構築当初は3.2m四方の小規模な竪穴建物跡であったものが、北壁を拡張して確認当初の形態になっていることが明らかになった。おそらくカマドも拡張の際に作り替えが行われたと考えられる。竪穴建物跡を新たに構築するのではなく、これまで使用していた竪穴建物跡内の一部の施設や床面の修復、拡張を行って必要最

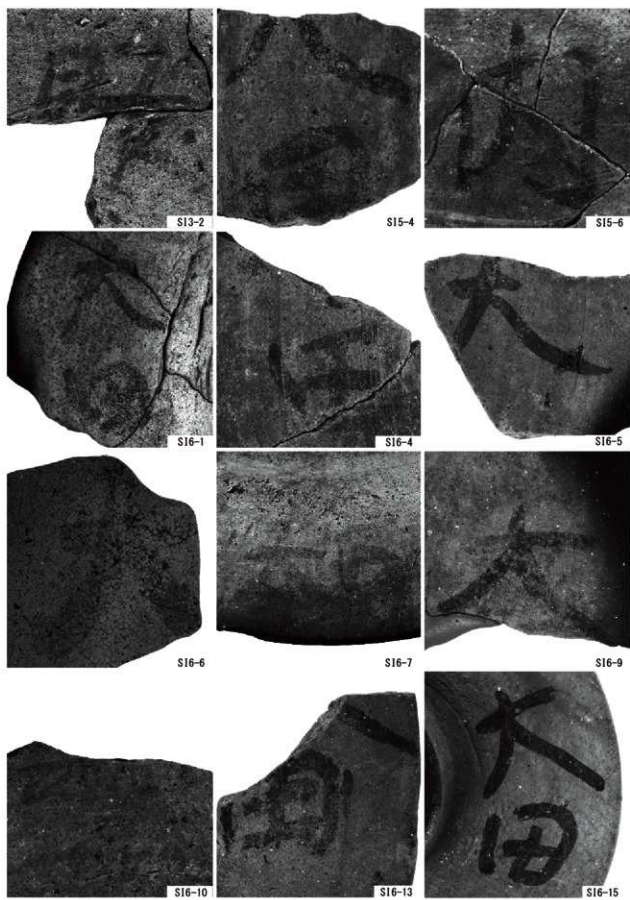
小限の労力で効率よく居住環境を維持していたことが理解されよう。ここで留意されるのは、これらの竪穴建物跡が調査範囲の中でも東側に偏在していることである。一方で、調査範囲西側の竪穴建物跡 S I 5・6 では、同様の時期に営まれたにもかかわらず、やや異なった状況が看取される。S I 5 は唯一焼失した家屋になっており、集落内にある 9 世紀後葉の竪穴建物跡の中では特異な存在となっている。焼失後に多量の土器が一括で廃棄されたようで、その中には石製の腰帯具も含まれていることも注目される。さらに S I 6 では北壁にカマドが見当たらず、カマドが設けられていない竪穴建物跡の可能性が高く、居住以外の目的で構築されたのではないかと考えられる。ここでは特定の文字が墨書された土器が北壁際付近にまとまった状態で出土しており、特定の文字で墨書された土器が多数見られることから、意識的な廃棄行為があったとみて良いだろう。今次調査は 9 世紀代を通して営まれた集落の一部ではあったが、廃棄行為の行われた竪穴建物跡が、集落の変遷していく中での時期差によるものであるのか、あるいは廃棄行為を行う必要のあった特別な施設であったのか、解明には至らなかったものの、これらの竪穴建物跡の相違は非常に興味深い調査結果となった。

3. 前神田遺跡第 2 次地点における墨書土器

確認された遺構・遺物の中で特筆されるものとして、S I 6 から出土した多数の墨書土器があげられる。墨書された土器 10 点の内、「大田」もしくは「大」、「田」、それに類似する特定の文字を墨書したものが 8 点であった（第 19 図）。それぞれの文字の意味は、「大」が良好な状態を表し、「田」が天・地・人に基づく一般的な呼称とされている。出土した遺構としては、前項で述べたように一部調査区外にはなるものの、カマドが構築されていない竪穴建物跡で、居住を目的とした竪穴建物跡とは異なった様相であることや、主に北壁側覆土中にまとまった出土状態から、意図的な廃棄行為があったと考えられた。さらに S I 6 の真北に掘立柱建物跡 S B 1 が構築され、双方の関連性がうかがえるような配置となっていることは注意されよう。出土した墨書の解釈を単純にみれば、生業に関わる何らかの機能を持った施設の可能性が示唆され、前述した廃棄行為に至ったのではないかの推測もできる。S I 5 からも 1 点のみではあるが「大田」の墨書土器が出土し、併せて石製の腰帯具が出土しているなど、遺物から見ても 9 世紀後葉に展開する集落の中にあつて S I 5・6 双方は特別な意味がありそうである。

【引用・参考文献】

- 赤井博之 1998 「古代常陸国新治宮跡跡の基礎的研究 (1) - 奈良・平安時代の須恵器編年を中心に -」『奈良考古』第 20 号 奈良考古同人会
福田義弘 2003 「熊の山遺跡出土の平安時代の土器様相 - 土器器を中心として -」『領域の研究 - 阿久津久先生還暦記念論集 阿久津久先生還暦記念事業実行委員会』
平尾政幸 1999 「平安京の石製帯飾り具」『リーフレット京都』№123 東京都埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館
平川 南 1991 「墨書土器とその字形 - 古代村落における文字の実相 -」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 35 集
塩谷 修 2010 「古代の集落遺跡と墨書土器 - 村落内寺院の発見 -」『2009 年度冬季展示室だより』第 10 号 土浦市立博物館
土浦市教育委員会 2018 『神立遺跡』
土浦市教育委員会 2016 『初賀場遺跡 (第 2 次調査)』
土浦市教育委員会 2009 『神立平遺跡』
土浦市教育委員会 2004 『大宮前遺跡』
土浦市教育委員会 2002 『木田余台 I』
土浦市教育委員会 1997 『入ノ上遺跡』
土浦市教育委員会 1991 『木田余台 I』
土浦市教育委員会 1989 『木田余台』
財団法人茨城県教育財団 1987 『霞ヶ浦川水建設事業地内埋蔵文化財調査報告書』『茨城県教育財団文化財調査報告書』第 43 集



第 34 図 墨書土器集成

写真図版



調査区全景（写真上が北東）



調査区全景（北上空から土浦入りを臨む）



調査前現況（西から）



基本層序（南西から）



調査区中央遺構検出状況（北西から）



S 1 1 全景 (南から)



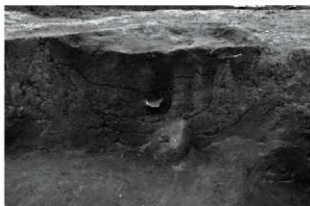
同 土層断面 (北西から)



同 遺物出土状況 (南から)



同 カマド近景 (南から)



同 カマド土層断面 (南から)



同 掘り方全景 (南から)



S 1 2 全景 (西から)



同 土層断面 (南から)



S 12 遺物出土状況 (西から)



同 遺物出土近景 (西から)



同 カマドA近景 (西から)



同 カマドA土層断面 (南から)



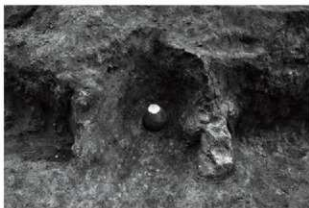
S 13 全景 (西から)



同 土層断面 (南から)



同 遺物出土状況 (西から)



同 カマドA近景 (西から)



S 1 3 カマドA土層断面 (南から)



同 カマドB近景 (南から)



S 1 4 全景 (南から)



同 土層断面 (東から)



同 遺物出土状況 (南から)



同 遺物出土近景 (南から)



同 カマド全景 (南から)



同 カマド土層断面 (南東から)



S14 第1期使用面全景 (南から)



S15 全景 (南から)



同 土層断面 (南から)



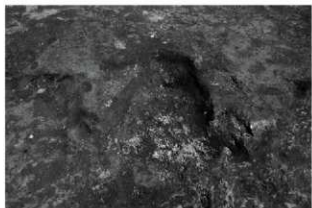
同 遺物出土状況 (南から)



同 遺物出土近景 (南から)



同 遺物出土近景 (南東から)



同 カマド全景 (南から)



同 カマド土層断面 (西から)



S16 全景 (北から)



同 遺物出土状況 (北から)



同 遺物出土近景 (東から)



S17 全景 (南から)



同 土層断面 (南西から)



SB1 全景 (西から)



同 P2土層断面 (南西から)



SB2 全景 (南から)



SB2 P5土層断面 (南東から)



同 P7土層断面 (西から)



SB3 全景 (東から)



同 P3土層断面 (西から)



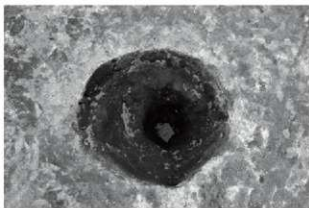
同 P5土層断面 (南西から)



SK1 全景 (南東から)



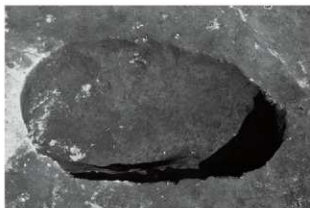
SK2 全景 (南東から)



SK3 全景 (南西から)



SK 3 土層断面 (東から)



SK 4 全景 (北西から)



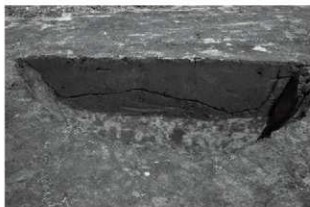
SK 5 全景 (南東から)



同 土層断面 (北東から)



SK 6 全景 (南東から)



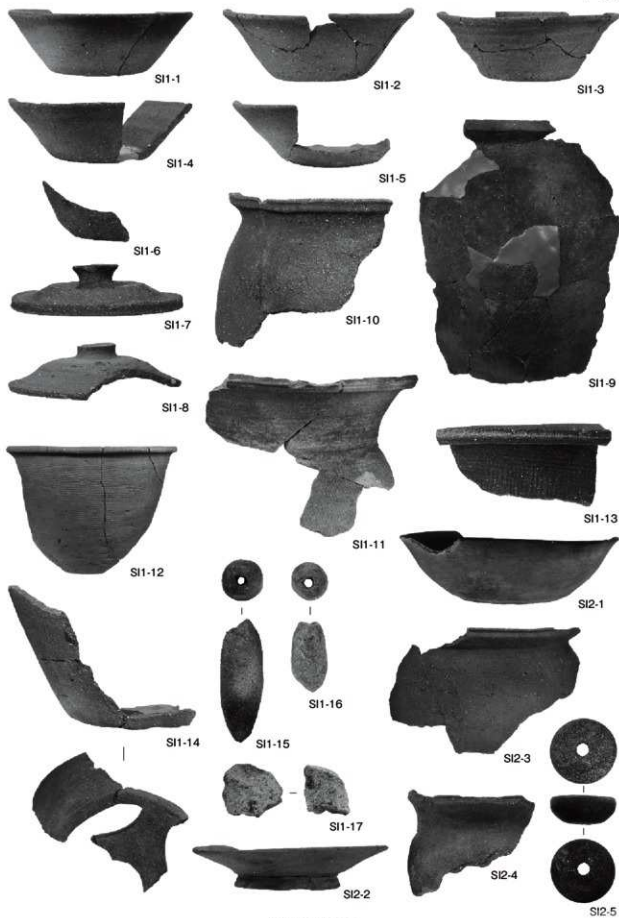
同 土層断面 (南東から)



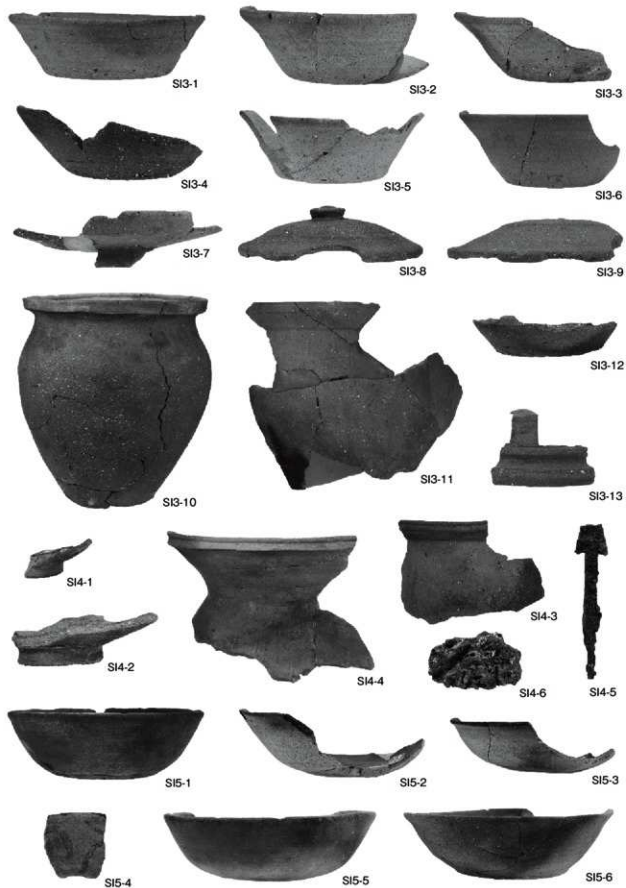
SK 7 全景 (西から)



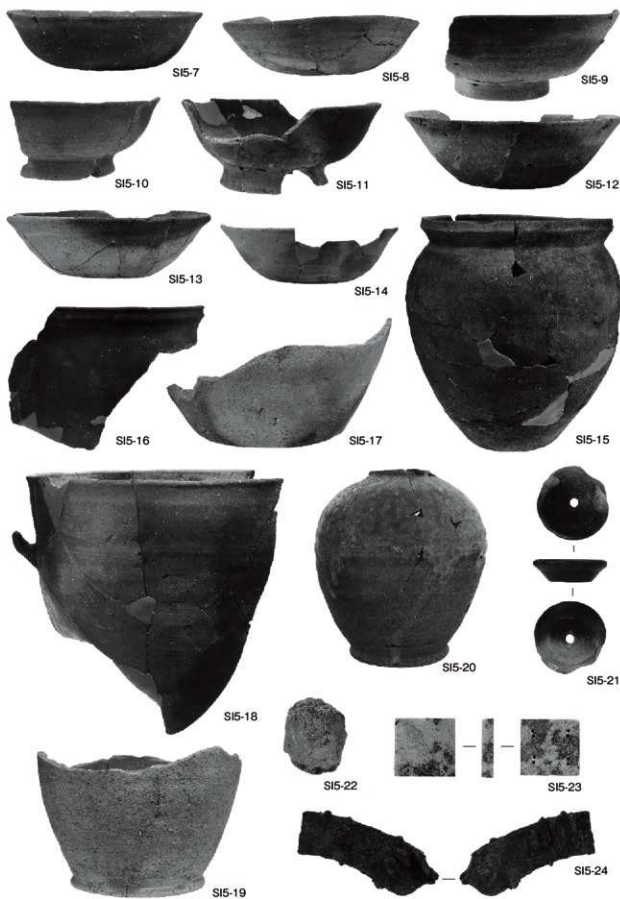
同 土層断面 (北西から)

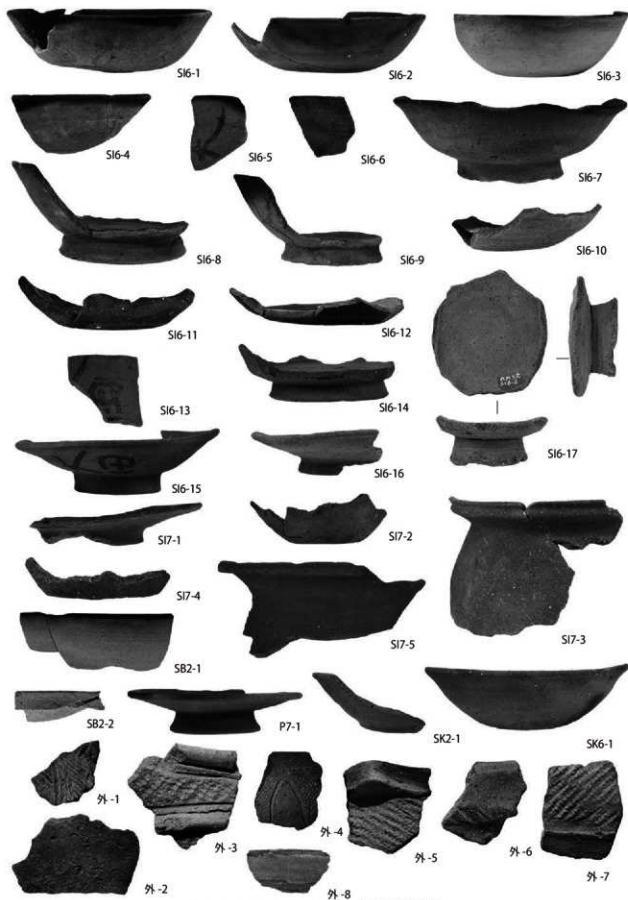


SI1・2 出土遺物



SI3・4・5 (1) 出土遺物





SI6・7、SB2、SK2・6、P7、遺構外出土遺物

抄 録

ふりがな	まえしんでんいせき (だいにじちようざ)							
書名	前神田遺跡 (第2次調査)							
副書名	宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
編著者名	表 豊 小川将之 田代真輝 高野浩之 比毛君男							
編集機関	株式会社 地域文化財研究所 〒270-1327 千葉県印西市大森2596 番地9 TEL 0476-42-7820							
発行機関	有限会社 エイ・エム・エー / 勝田商事 有限会社 / 土浦市教育委員会 / 株式会社 地域文化財研究所							
発行年月日	2023年2月26日							
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	°' "	°' "			
まえしんでんいせき 前神田遺跡 (だいにじちようざ) (第2次調査)	茨城県土浦市神立町 字複戸2590番1の 一部	08203	194	36° 6' 33.94"	140° 13' 30.57"	20220620 ～ 20220726	642.74㎡	宅地造成
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
前神田遺跡 (第2次調査)	集落跡	縄文時代 平安時代	陥し穴状遺構 1基 竪穴建物跡 7軒 掘立柱建物跡 3棟 土坑 6基 ピット 7基	縄文土器：前期、中期、後期 土器器：坏、高台付埴、皿、 高坏、鉢、甕、瓶 須恵器：坏、高台付坏、盤、 皿、蓋、鉢、甕、甕、 瓶、耳皿、円面硯 灰釉陶器：壺、瓶 土製品：管状土鉢、紡錘車、 環口 石製品：高方、紡錘車 鉄製品：鉄鍬、鎌	SI5から石製の 腰帯具(逡方)が 出土した。SI6から は「大田」もしくは 「大」,「田」と 記された墨書土器 が多数出土した。			
要約	今次地点で検出された遺構は、縄文時代の陥し穴状土坑1基、平安時代の竪穴建物跡7軒、掘立柱建物跡3棟である。平安時代の遺構は、出土した遺物の様相から9世紀代にわたる継続的な変遷がうかがえる。竪穴建物跡の内、3軒はカマドの造り替えや床面の修復、さらには拡張などの痕跡が認められた。また石製腰帯具(逡方)や、まとまった墨書土器が出土した遺構の存在が注目される。							

前神田遺跡（第2次調査）

—宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

発行日 令和5（2023）年2月26日

編集 株式会社 地域文化財研究所
〒270-1327 千葉県印西市大森2596番地9
TEL 0476-42-7820

発行 有限会社 エイ・エム・エー /
勝田商事 有限会社 / 土浦市教育委員会 /
株式会社 地域文化財研究所

印刷 株式会社 正文社